

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第14集

TA KI NO MI NE
瀧の峯古墳群

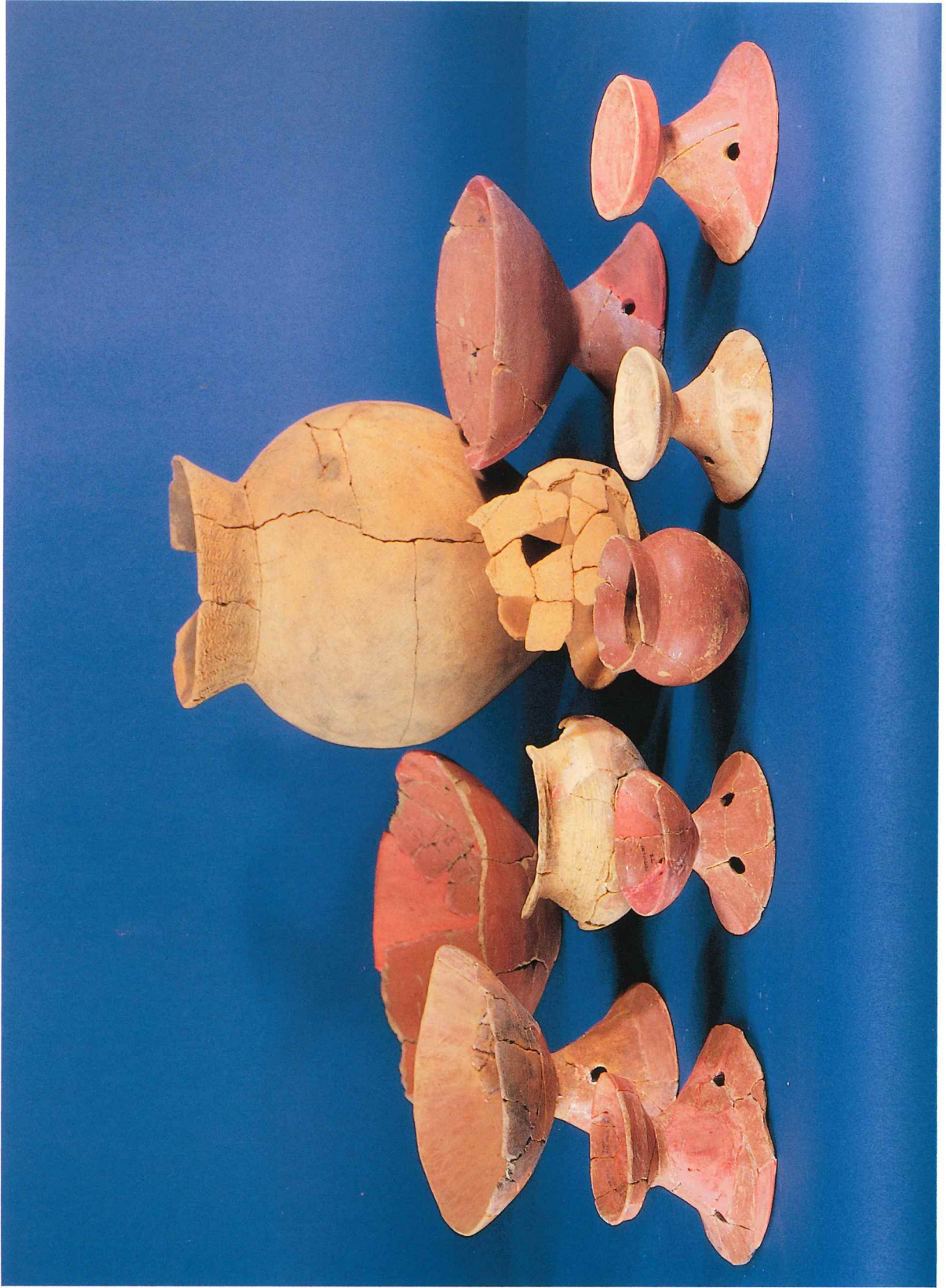
長野県佐久市根岸瀧の峯古墳群発掘調査報告書

1986

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター



瀧の峯2号墳全景



瀬の峯 2 号墳出土土器

例 言

1 本書は、文化庁の国庫補助金及び市費により実施した昭和61年度佐久市志編纂事業原始・古代編に関わる、瀧の峯古墳群試掘調査・周辺分布調査の報告書である。

2 調査者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

3 発掘調査所在地番 瀧の峯古墳群（NTM）
佐久市大字根岸 3328, 4897, 4898, 4899

4 調査期間 発掘調査 昭和61年 8月2日～11月4日
整理調査 昭和62年 2月2日～2月21日
分布調査 昭和62年 2月23日～2月28日

5 調査団の構成

事務局

佐久市教育委員会

教 育 長 大井 昭二
教 育 次 長 柳沢 昇一
社会教育課長 木内 捷
社会教育係長 関本 功
社会教育係 白石 賢次
林 幸彦
高橋 和敬
荻原 一馬
羽毛田卓也

佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳
庶務係主査 島山 俊彦
庶 務 係 高橋 純子
調 査 係 主任 高村 博文
調 査 係 三石 宗一
小山 岳夫

調査団

顧 問 岩崎 卓也（筑波大学教授）
団 長 大井 隆男（佐久市志編纂委員長）
副 団 長 木内 寛（佐久市志編纂常任委員）
現 地 指 導 者 白倉 盛男（佐久考古学会副会長）
井出 正義（佐久考古学会幹事長）
福島 邦男（望月町教育委員会）
白田 武正（長野県埋蔵文化財センター）
島田 恵子（佐久考古学会員）
花岡 弘（小諸市教育委員会）
森泉かよ子（佐久考古学会員）
堤 隆（御代田町教育委員会）
羽毛田卓也
調 査 担 当 者 林 幸彦
調 査 主 任 佐々木宗昭（佐久考古学会員）
羽毛田伸博（佐久考古学会員）

目 次

本 文 目 次

例 言

第 I 章 調査の概要

- 第 1 節 調査の動機と経過..... 1
- 第 2 節 調査日誌..... 2

第 II 章 瀧の峯古墳群の概観

- 第 1 節 瀧の峯古墳群付近の自然環境（地形と地質）..... 3
- 第 2 節 瀧の峯古墳群の歴史的環境..... 5

第 III 章 基本層序

- 第 1 節 基本層序..... 12

第 IV 章 遺構と遺物

- 第 1 節 古墳と出土遺物..... 16
 - 1) 瀧の峯 1 号墳..... 16
 - 2) 瀧の峯 2 号墳..... 19
 - 3) 瀧の峯 5 号墳..... 29
- 第 2 節 その他の出土遺物..... 30
- 第 3 節 分布調査の成果..... 34

第 V 章 総括

- 第 1 節 遺 構..... 35
- 第 2 節 遺 物..... 37
- 第 3 節 ま と め..... 40

引用参考文献..... 44

付 編

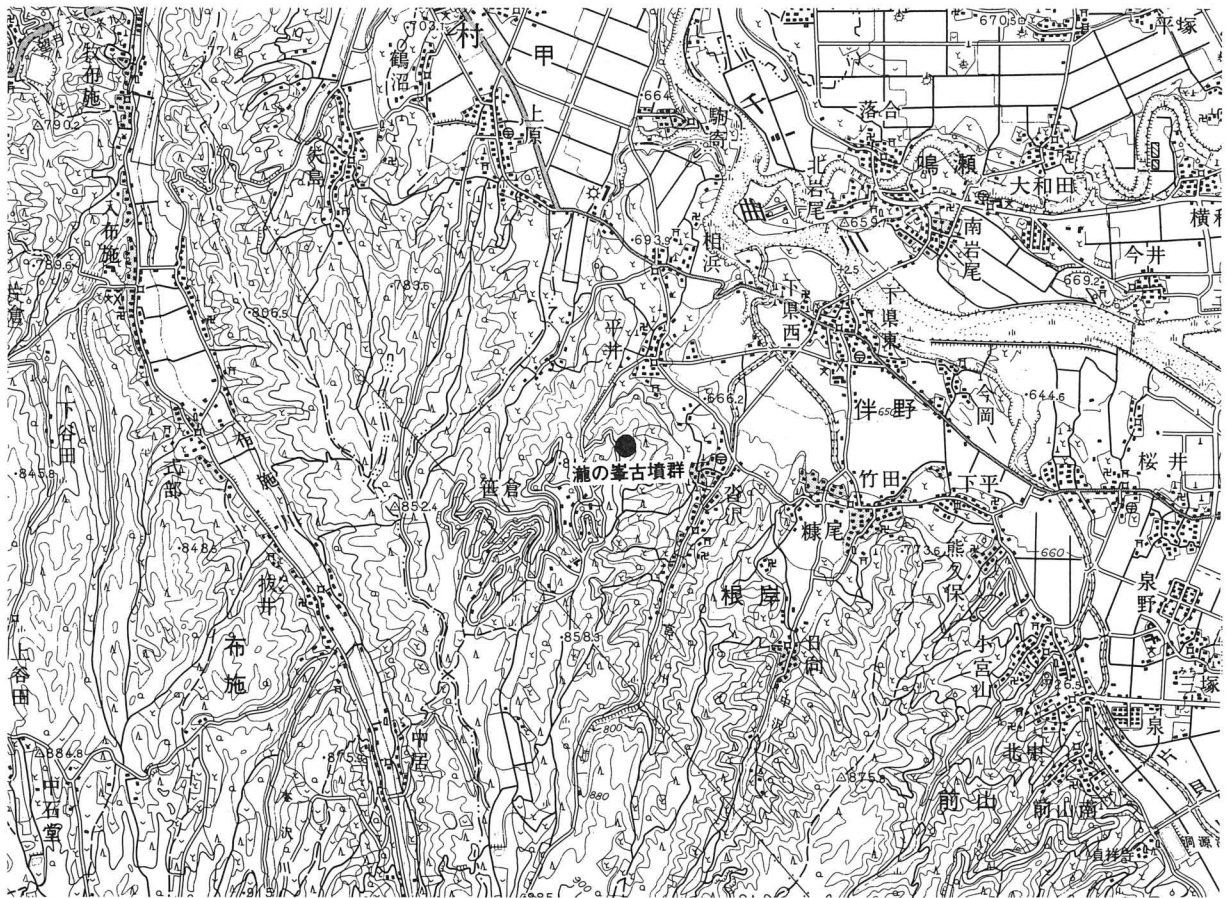
森本岩太郎 佐久市瀧の峯古墳群 2 号墳出土の人歯について

第I章 調査の概要

第1節 調査の動機と経過

瀧の峯古墳群は、佐久市根岸地籍に所在し、付近の地形は、蓼科山から佐久平に向けて放射状に山麓部が延びており、その一つが平井の集落に突出するような尾根地形となっている。瀧の峯1～4号墳は、この尾根がゆるやかに傾斜する標高800m内外の平坦部に20～30mの間隔の近接した距離に群在しており、眼下を流れる宮川との比高差は約150mを測る。さらに1～4号墳から北東約300mの尾根の先端部には、瀧の峯5号墳が存在しており、標高約764m、1～4号墳との比高差は約36mを測る。現在は雑木林に覆われて見通しがよくないが、本来なら眼下の岸野地区はもちろん、北方に広がる佐久平を一望できる絶好の場所である。

瀧の峯1号墳からは、昭和49年に炭焼き作業の際に鉄剣と鉈状の鉄製品が出土し、佐久地方において初見の前方後円墳ではないかと注目されたことがある。その後、地形測量が行われ、前方後円墳ではないことが判明したが、佐久地方最古の古墳の一つであろうと位置づけられた。そこで、佐久市志編纂事業の一環として、従来、佐久地方において空白とされていた4世紀～5世紀前半代の古墳の一端を明らかにする目的で、佐久市志刊行会を中心として、本古墳群の確認調査が計画された。今回の調査は、1・2号墳の地形測量、墳丘形態及び主体部の確認、5号墳の地形測量を目的として、佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターが確認調査を行った。



第1図 瀧の峯古墳群位置図（1：50,000国土地理院地形図による）

発掘調査は、昭和61年8月2日から9月13日までは、佐久埋蔵文化財調査センターが主体となり、1・2号墳の周溝を確認するためのトレンチ設定・掘り下げ、1号墳の墓壇の確認、2号墳の周溝の掘り下げ、1・2・5号墳の地形測量を行った。その結果、1号墳の墓壇は大半が攪乱を受けており、土層断面によって若干の観察ができたのみであるが、2号墳の周溝内、特に墳丘東側より多量の土器が出土した。そこで、本古墳の墳形及び墓壇を明確にすることが必要であるとの判断から、佐久市教育委員会が主体となり、10月13日から11月4日まで、2号墳の墳丘部ストリップ及び墓壇の確認・掘り下げを行った。また、本古墳群の周辺において同様な古墳の存在が予想されたため、昭和62年2月23日から28日まで分布調査を行った。本古墳群の付近は、先述した様に蓼科山からの尾根が幾筋も北方に延びており、分布調査はその尾根上を中心に行った。その結果、本古墳群の存在する尾根の東側、沓沢に面した東傾斜面に2基、さらに、沓沢と日向にはさまれた尾根上に5基の古墳が確認された。標高は約740～810mを測り、本古墳群から約300m～620mの距離を有する。また、本古墳群から西方へ約1km離れた虚空蔵山の北側斜面、標高約710mの地点に前方後円墳の可能性を有する古墳が1基発見されたが、調査が行われていないため明確ではない。これらの古墳はいずれも、瀧の峯古墳群と同様に、北方に広がる佐久平を一望できる尾根上に位置している。

第2節 調査日誌

昭和61年7月29日（火）

佐久市志刊行会・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターの三者で、調査団の構成、調査の日程・方法について協議を行う。

8月2日（土）

現地にて地鎮祭を行い、終了後、墳丘上及び周囲の雑木等の伐採、テント設営を行う。

8月5日（火）～7日（木）

雑木の伐採と、グリッド設定作業、1・2号墳の地形測量を併行して行う。

8月8日（金）～12日（火）

1・2号墳の周溝確認のため、墳丘周囲にトレンチを設定し、掘り下げを行う。また、1号墳の墓壇の確認を行うが、既に大半が攪乱を受け、極く一部が残存するのみである。

8月18日（月）・19日（火）

1号墳墓壇より検出された礫の実測・写真撮影、2号墳墳丘の精査を行い、墓壇の検出を行うが、明確ではない。

8月20日（水）～9月5日（金）

2号墳の周溝確認・掘り下げを行い、写真撮影、実測を行う。また、1号墳墳丘部にトレンチを設

定し、墳丘の立ち割りをを行う。

9月6日（土）～13日（土）

1・2号墳の土層断面図・平面図作成、5号墳の地形測量、写真撮影を行う。

9月21日（日）

笹沢 浩氏、関川尚功氏に主体部の確認方法等についてのご教示を受ける。

10月9日（木）

2号墳の墓壇確認のため、墳丘部に散水を行う。

10月13日（月）～11月14日（金）

2号墳の墳丘部東側ストリップ作業と、墓壇の確認・掘り下げ・覆土の土ふるい、写真撮影・実測を行う。10月25日岩崎卓也氏、11月2日小林秀夫氏、小林 孚氏に現地にてご指導を受ける。

12月17日（水）～20日（土）

1・2号墳の埋め戻し作業を行う。

昭和62年2月2日（月）～21日（土）

室内において報告書作成作業を行い、本古墳群の調査を完了する。

2月23日（月）～28日（土）

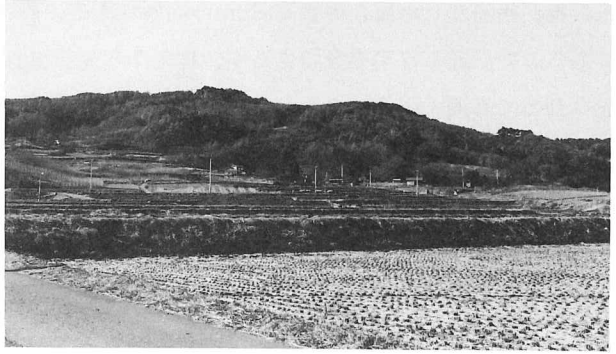
本古墳群周辺の古墳分布調査を行う。

第II章 瀧の峯古墳群の概観

第1節 瀧の峯古墳群付近の自然環境（地形と地質）

I 地形

長野県歌「信濃の国」の中に唄われている四つの平の一つである佐久平は千曲川の上流標高約700mを中心として、南北約20km・東西最大約10kmの長菱形で佐久市地域の大部分を含む高原盆地である。東側は群馬・長野県境をなす関東山地の最西北端部の延長が佐久山地となり、一部分では茂来山(1717m)の尾根のように千曲川沿岸まで迫る所もあり、八風山(1315m)・物見山(1375m)・荒船山(1422m)を主峯とする妙義荒船佐久高原国定公園などに限られ、南端は三国山(1850m)・甲武信ヶ岳(2468m)・金峯山(2595m)の



第2図 瀧の峯古墳群遠景

高山地帯の秩父多摩国立公園によって埼玉・山梨県境に接している。西側はホッサマグナ（日本中部地溝帯）中心部に隆起噴出した赤岳(2899m)・硫黄岳(2742m)・蓼科山(2530m)・霧ヶ峯・美ヶ原台地と続く八ヶ岳蓼科火山列の八ヶ岳中信高原国定公園によって諏訪郡界が形成されている。北側は活火山浅間山(2560m)を南端とした上信越高原国定公園によって限られている。日本全国で国立28・国定52の自然公園中の4公園に囲まれ自然景観風光に恵まれた地域である。

したがって佐久平は、千曲川を流出する北部小県上田方面のみが平地続きで、他の方面は何れも山地に囲まれ他地域への交通は全て峠越しをしなければならなかった。現在はあまり利用されていないが古代から通交した記録のある峠路を数えてみると群馬県側18・埼玉県側2・山梨県側6・諏訪側7・小県側2の計35の峠をあげる事ができる。奈良・京都と関東地方との交通重要道路としての東山道・中山道、本州の縦貫道としての北国街道・善光寺街道・佐久甲州街道も全て佐久平を通過しており、それらが活用されていた時代には地方交通、物資の流通・裏街道・女街道としてもこれら多くの峠路は重要な任務を果たしていたわけである。

地形や風景を表現する文字に山河とか山水などが用いられているが、佐久平の河水は千曲川がすべてを代表している。千曲川は甲武信ヶ岳から源を発し、最上流部の川上村地域では西流し、南牧村に入ると両岸は岩壁に囲まれた峡谷を北流し、小海町附近でようやく谷巾を広め、佐久町附近で河床の標高750m内外となり、両岸は次第に平地が広がり、佐久平はこの附近から開けて、ほぼ北流して小諸市布引で標高550mとなる。この千曲川の流路が長菱形の佐久平の長い対角線に大体一致し、佐久市の中心部附近で東西巾が最も広く、菱形の短い対角線にあたっている。佐久地方を広葉樹の葉にたとえたとすると千曲川はその葉の主脈にあたり、その側脈には両岸から多くの支流が中心部に流入している状態で佐久平とその周辺では天然水に恵まれた水量も安定しており、早くから用水路も拓かれ旱害水害を受けることはほとんどなかった。この事は弥生式土器や遺跡の分布が実証し、佐久平では稲作の反当り収穫量は全国的にみても上位であり、それに関連して江戸時代以来特殊産業としての稲田養鯉も盛んとなり、佐久鯉として質・量共に伝統を持ち続けた要因ともなっていた。

高原盆地佐久平は年間平均気温10℃内外、降水量年計約1,000mmと少なく、高燥な大陸性気象に恵まれ、晴天日

数が多く日照時間・紫外線量にも恵まれ牧畜・稲作に実証された奈良・平安時代の勅使牧・佐久米の生産がそれらを物語っている。

II 地質

佐久平の東西巾の最も広がっている佐久市の中心部西端にある岸野根岸地区の水田地帯と蓼科火山の噴出堆積物の作る山麓斜面が交わる平井部落の南方1kmの、山麓末端部が段丘状に稍盛り上った部分が瀧の峯であり、その上面に本遺跡古墳群が分布している。この附近は蓼科山頂の東部にある双子山(2223m)から北東方面に突出したゆるやかな山嘴が順次傾斜をゆるめ、標高1,000m附近で数本の尾根状山なみを作り途中各所に小平坦地を作っており、東立科開拓地などのような傾斜のゆるい表土の厚い耕作適地を形成している。瀧の峯はその尾根の末端部が稍隆起した段丘の標高800mの高地である。最近の現地の状況は雑木・赤松が繁茂し手入れせずに放置してあるので見通しは不十分であるが、林間から遠望すれば眼下に根岸・伴野の佐久平の水田地帯や千曲川の流路をへだてて高瀬・中佐都の段丘末端平地を、遠くは活火山浅間山の噴煙も望める展望雄大な高燥地である。平井部落が標高680mであるので瀧の峯との比高は120mである。

根岸地区附近の地質構成は、最下部基盤の好露出地は伴野字倉瀬の通称金竜寺崖の千曲川側に見られ、高さ約30m余の標式的断面がある。下部から凝灰質砂岩・凝灰岩・凝灰質頁岩・細粒砂岩・礫質凝灰岩の淡水堆積の互層が繰返しており、中部の凝灰質砂岩の薄層には美事な層間褶曲の発達が見られ、砂層中には偽層の発達もあり堆積環境の平穏でなかったことを表現されている。本層中にはナウマン象の歯・鹿の角、植物ではメタセコイヤ・あかさんしょうばら・ひめばらもみ・つげ・まんさく・さわら・とうひ・広葉樹の葉等の化石が発見され、これらの研究から新生代第四紀洪積期初頭の地層であることが決定され相浜層と命名されている。この地層は望月町爪生坂附近から相浜・虚空蔵山下底(糠尾・竹田・下平・熊久保、後沢)・前山城下底・貞祥寺・地家・大沢旧小学校台地・白田町滝附近までの蓼科火山山麓下底部の基盤として広く分布している千曲川堰止湖による淡水堆積層である。

この相浜層の上部には旧蓼科火山群初期の噴出物である集塊岩泥流が火山裾野末端部では極端に薄く、噴出中心部に近づくに従い厚さを増して火山基底地層となって広範囲に分布している。この基底集塊岩中には各種の安山岩の大塊・角礫も含んでおり一部角礫集塊岩となっている所もあり、宮川・中沢川の中流谷底部に露出している。相浜層の上部に集塊岩が50m以上の厚層で不整合に堆積している露頭は竹田の多福寺から虚空蔵山への登山道でも確認することができる。不整合面からは地下水の湧泉が見られることは多福寺境内・貞祥寺境内・大沢十二ヶ滝が好例である。

集塊岩の上部には蓼科火山系の各種安山岩溶岩が十数回に亘って噴出流下して堆積していることは他地区や火山中腹部以上では調査確認されているが当地区での露頭でみられるものはない。見えない一つの理由は山麓斜面が緩傾斜面であり、長期の火山活動に基づく火山灰の堆積が厚く、しかも風化しローム化して10m内外の厚さで被っていることにもよる。このロームは黄褐色を呈し、一部は鹿沼土化しているものもあり水稻苗代用土として各地で採掘されているので一般に知られている。このローム層中には一部旧河床礫の円礫を夾んでいる所もあり瀧の峯近辺でも確認できた。

根岸の水田地帯は佐久平の最西端部にあたり宮川・中沢川の谷口扇状地で礫堆が堆積しているが、伴野に近づくに従い千曲川氾濫原の良質の粘土層が厚く堆積し、水田の貯水層となって水稻多収穫地帯をささえている。この粘土層には流入植物質を含む部分もあり一部泥炭層をも夾み、かつて試掘した事もある。有機質を含む微粒子粘土層は黒褐色で粘性が強く、既に石附で須恵器窯も発掘されて生産も確認され、現代まで相浜瓦(和瓦)の原料ともなっている。

この附近の水田は古くから拓かれており佐久平の中でも土地肥沃で現在も良質米多収地帯である。

(白倉盛男)

第2節 瀧の峯古墳群の歴史的環境

周辺遺跡

瀧の峯古墳群周辺の遺跡は、縄文時代から近世と幅広く、また立地においても例えば尾根上、片貝川の微高地上と多岐にわたっている。したがって、ここでは、調査された遺跡を一瞥するにとどめ、多くを3・4世紀の遺跡について触れることにしたい。

今のところ、この地域で最古の例は、榛名平遺跡群(35)で、縄文時代草創期にあたり、御子柴型ポイントが出土している⁽¹⁾。市内で最古の例でもある。続く前期では、昭和51・52年に調査された後沢遺跡⁽²⁾(10)がある。前期前半の住居址6棟、中期後半の住居址3棟が検出されている。特に前期の資料は佐久平でも数少ない好資料と言える。前期ではこのほか、小金平遺跡(4)で住居址が1棟検出されている。中村遺跡群(13)は、昭和57年に調査された中期の集落址で、中葉から後葉の住居址16棟などが検出されている。縄文時代では以上のほか、舞台場⁽⁴⁾(5)、西裏⁽⁵⁾(9)、竹田峯⁽⁶⁾(9)遺跡で土器片、石器が出土している。

弥生時代では、中期後半の住居址が、後沢で3棟、西裏で7棟、竹田峯で2棟検出されている。後沢では円形プランのものがあり、西裏・竹田峯では一般に隅丸方形プランを呈するらしい。この時期の多様性を物語っている。後期前半は、確実なもので竹田峯で1棟確認されている。これに対し、後半は多く、後沢で32棟、舞台場で13棟、西裏で4棟の住居址がそれぞれ検出されている。このうち、舞台場の土器は新旧の様相が認められ、2分される可能性が強い。

墓制では、佐久平で初めて検出された方形周溝墓として後沢の3基がある。このうち、2基は調査されていないが、この時期として大過ないだろう。また、竹田峯では壺棺が検出されており、胎児骨と副葬された管玉・ガラス小玉が出土している。壺棺から人骨が出土した例は、県内では例がないようで、貴重な資料を提供していると言える。また、竹田峯の周溝2基は、周溝墓の可能性が指摘されている。

弥生時代終末から古墳時代前期にかけては後述することにし、古墳時代中期に移る。この時期の遺構には、西裏遺跡で2棟の住居址のほか、特殊遺構があり、墓址と考えられている。

続く後期の住居址は舞台場で10棟、後沢で9棟検出されている。舞台場は前半・後半の二時期に区分されるが後沢は前半のほぼ単一の時期の所産である。

古墳には、火の雨塚(7)、釜塚(11)、墓陵(12)、水操(14)といった古墳が知られている。いずれも横穴式石室をもつ円墳である。

火の雨塚からは既出資料ではあるが、埴輪が出土している⁽⁷⁾。円筒と靱のほか、馬形の破片があると言われているが定かでないと言われている。

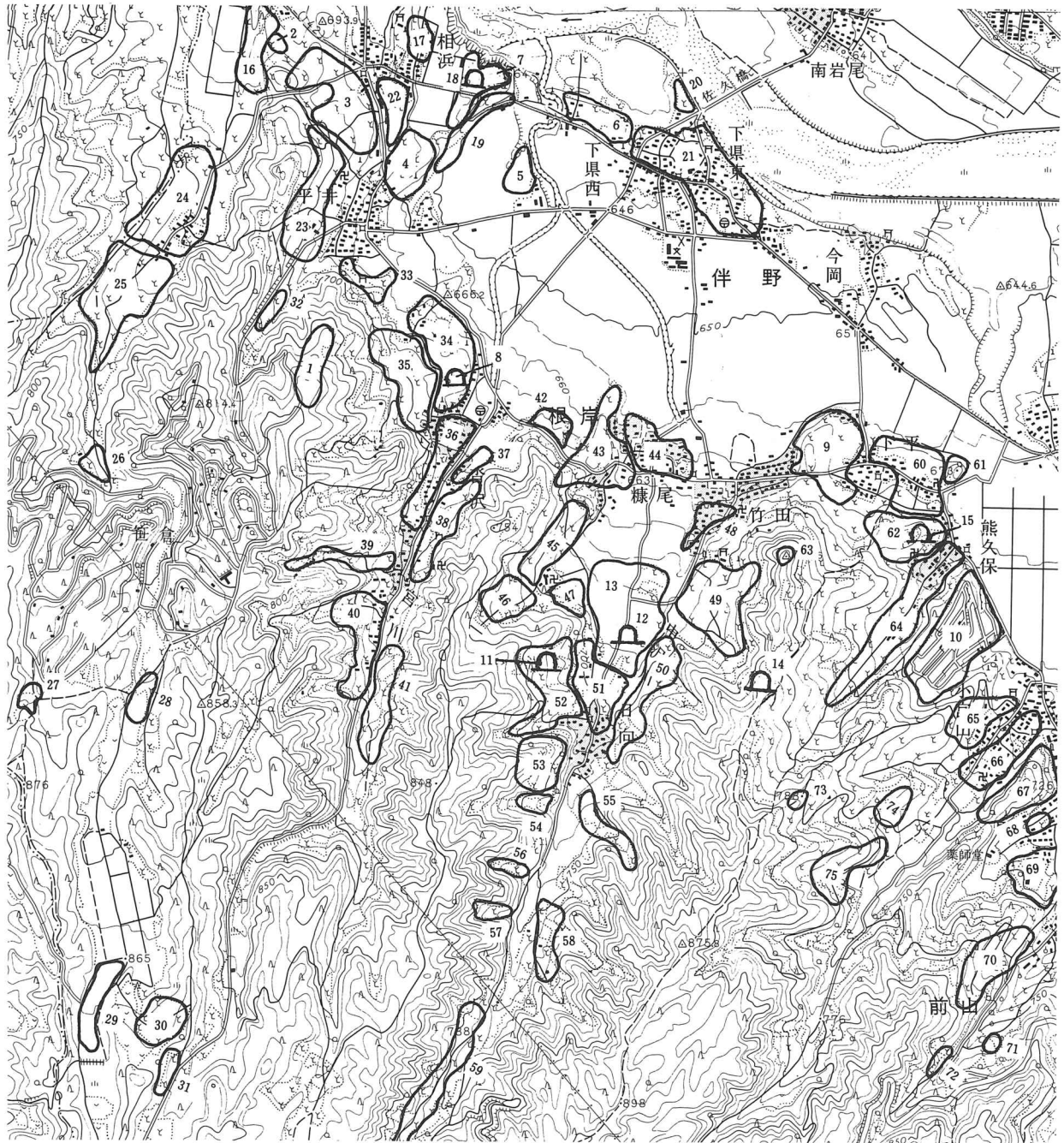
釜塚では、昭和41年に直刀7～8本と鐔・刀子・鉄鏃・刀装具が出土している⁽⁸⁾。

墓陵古墳は、彦狭島王埋葬の古墳との伝承を持っており、古墳の名称もこれに由来するという⁽⁹⁾。

一方、生産関係では、石附窯址群⁽¹⁰⁾(2)がある。須恵器窯1基、製炭窯3基が検出されている。須恵器は7世紀後半と考えられ、佐久の窯址群では最も古く位置付けられる。また、製炭窯もこの頃と考えて良いだろう。

奈良・平安時代では、後沢で1棟、舞台場で29棟、西裏で2棟検出されている。このうち、舞台場H11号住居址から須恵器鉄鉢が出土し注目される。伴出した土器は、奈良・平安二時期のものが混在し、住居址の時代は断定できないが、宮下健司氏によれば村棲みの僧侶がいたものとされる。また、後沢では、緑釉陶器が出土しており、佐久平でも貴重な資料と言える。

墓址では、休石遺跡⁽¹¹⁾(6)が知られている。昭和初年から完形の須恵器大甕が出土した遺跡として知られ、昭和43年には県道岸野線改修工事の際、大甕3個の中に、それぞれ長頸壺・甕・蔵骨器が入って発見された。その



第3図 周辺遺跡分布図

後、昭和53年に岸野村誌刊行会が主体となり確認調査が行われた。その結果、10～12世紀の火葬墓群であることが判明した。

降って、中世では、宝生寺山砦(61)、虚空蔵山狼火台(63)など城址関係の遺跡が知られている。また、舞台場遺跡で内耳土器が知られるほか、既出資料ではあるが、小金平遺跡から常滑の甕に入った備蓄銭約14,400枚が出土している。種類は、開元通宝など60種である。

このように、縄文時代から中世と一瞥しただけでも、この地域がそれぞれの時代において活発に展開した地域といえる。

佐久平においては、弥生時代から古墳時代の移行期についての資料は少なかった。最近の調査の増加によりこの時期の資料も増えてきている。瀧の峯古墳群はまさにその代表と言える。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考	
					縄	弥	古	奈	平		中
1		瀧の峯古墳群	根岸字瀧の峯・瀧の山・堂の入山	山麓			○				本調査
2	212	石附窯址	根岸字石附	山腹			○				昭和55年度発掘調査
3	213	立石遺跡	根岸字立石	台地			○	○	○	○	昭和56年度一部発掘調査
4	216	小金平遺跡	根岸字小金平	〃	○	○	○	○	○	○	昭和56年度一部発掘調査
5	220	舞台場遺跡	根岸字反り田	〃		○	○	○	○	○	昭和56年度発掘調査
6	219	休石遺跡	伴野字休石	段丘		○	○	○	○		昭和53年度発掘調査
7	223	火の雨塚古墳	伴野字唐松坂2161	台地			○				
8	316	坪の内古墳	根岸字坪の内	山麓			○				
9	317	西裏遺跡群	伴野字西裏、根岸字竹田峯・小滝	丘陵	○	○			○	○	昭和60年度一部発掘調査
10	400	後沢遺跡	小宮山字後沢	台地	○	○	○	○	○		昭和51・52年度発掘調査
11	398	釜塚古墳	根岸字天童	山腹			○				
12	399	墓陵古墳	根岸字中村	扇状地			○				移転復元したもの
13	387	中村遺跡群	根岸字中村・道夕・十二下・天童	扇状地	○	○	○	○	○		昭和57年度一部発掘調査
14	549	水操古墳	根岸字水操	山頂			○				
15	328	西東山古墳	伴野字西東山	丘陵			○				
No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名
16	211	石附遺跡	31	463	東立科A遺跡	46	385	社口A遺跡	61	546	宝生寺山砦
17	210	東畑遺跡	32	299	堂の入遺跡	47	386	社口B遺跡	62	319	西東山遺跡
18	218	唐松坂遺跡	33	300	瀧の前遺跡	48	312	西村中遺跡	63	326	虚空蔵山狼火台
19	217	相浜田遺跡	34	302	坪の内遺跡群	49	313	水操遺跡群	64	320	東山遺跡
20	222	東窪井戸遺跡	35	303	榛名平遺跡群	50	390	山法所遺跡群	65	405	上の山遺跡
21	211	下県屋敷遺跡群	36	304	脇坂南遺跡群	51	388	長坂口遺跡群	66	404	西の張遺跡
22	214	馬場平遺跡	37	307	大日影B遺跡	52	389	下長坂遺跡群	67	416	前山城跡
23	215	上畔遺跡	38	306	大日影A遺跡	53	397	日向城跡	68	407	居屋敷遺跡
24	295	五本木遺跡	39	305	新海坂遺跡群	54	392	三年替戸A遺跡	69	408	瀧の下遺跡
25	296	石原坂遺跡	40	382	村上遺跡群	55	391	筒村遺跡	70	410	高尾A遺跡
26	298	鉢山遺跡	41	383	上正源遺跡群	56	393	三年替戸B遺跡	71	550	川越石窯址
27	380	西赤穂木遺跡	42	308	堀の内遺跡	57	394	エヶ平遺跡	72	476	高尾B遺跡
28	381	外輪平遺跡	43	309	伊勢山遺跡	58	395	石平遺跡	73	401	小山の神A遺跡
29	461	赤穂木A遺跡	44	310	居村遺跡	59	467	東笹倉遺跡群	74	402	小山の神B遺跡
30	462	赤穂木B遺跡	45	311	月田畑遺跡	60	318	北裏遺跡群	75	403	長ヶ窪遺跡

ここでは、佐久市を中心として、弥生時代末から古墳時代前葉について述べることにしたい。

外来系土器

県内の土師器の成立については以前触れたことがあり、その中で外来系土器についても述べた⁽¹²⁾。ここでは、その後の資料も加え佐久平の在り方について触れる。

弥生時代以降、佐久地方における外来系土器は、中期後半では明らかでなく、後期前半に入ってからと指摘されている(小山 1987⁽¹³⁾)。佐久市周防畑B遺跡Y2・4・16・18号住居址から埼玉・群馬県の吉ヶ谷・赤井戸式土器に類似する単節斜状文をもつ甕、さらに、佐久市北西ノ久保Y70号住居址から西日本からの影響を受けたと考えられる口縁部が折れ曲がり垂下する壺の口縁部が各々出土している。

続く箱清水期については今一つ明らかでないが、この時期かあるいはやや後出するものとして、下小平遺跡で天竜川水系の¼円孤文をもつ壺がみられる⁽¹⁴⁾。

佐久平で外来系土器が顕著となってくるのは御屋敷式土器の頃からと言える。既出資料ではあるが、立科町中原上遺跡の元屋敷式の壺、瓢壺、椀のほか、発掘資料として小諸市久保田遺跡出土のS字状口縁台付甕形土器、

小型高杯脚部などがある。⁽¹⁵⁾ いずれも搬入品であろう。また、南関東系とされる佐久市西一里塚採集の壺もこれとさほど時間差はないだろう。いずれにせよ、他地域と同様、東海地方西部系の土器が目立つ。

これに対し、北陸系の土器の例は僅かである。先に佐久平でも北陸系土器の出土を予測したが、西裏遺跡から小型高杯の出土例があり、法仏Ⅱ・月影・古府クルビ式の中に類例があるとされている(小山 1986)⁽¹⁶⁾。上小地方と量的にはともかく時間差はなくなったと言える。なお、西裏例より後出するものとして望月町後沖に出土例がある。⁽¹⁷⁾

住居址・炉

佐久平では残念ながらこの時期のまとまった集落は明らかではない。したがって、ここでは住居址を中心に見ていくことにしよう。御屋敷遺跡で指摘されたように、⁽¹⁸⁾ 千曲川水系ではこの御屋敷期に住居址のプランが長方形から方形へと変化する。この点は、既に小諸市久保田Y2・Y3号住居址でも確認されている。

一方、この時期の佐久市内の住居址ではプランの明確なものは少ないが、安原の池畑遺跡第1・2号住居址がある。⁽¹⁹⁾ 報告書によれば、土器の接合関係から2棟の住居址は時期的に近似するとされる。第1号住居址は南北にやや長い隅丸方形、これに対して第2号住居址は隅丸長方形で、プランでは箱清水期の系譜上にあると言える。また、舞台場遺跡Y3号住居址も隅丸長方形である。したがって、今のところ佐久平では、方形・長方形の2種の平面形が混在していることになる。こうした点が地域性によるものか、今後の課題である。

次に炉址についてみよう。炉址については以前、千曲川流域の弥生時代の炉を集成し、その在り方について触れたことがあった。⁽²⁰⁾ そして、その中で、佐久平にあっても違いがあることを述べた。

小諸市久保田Y2・Y3号住居址では、箱清水期に多い柱穴間中央にある、炉縁石をもつ土器埋設炉であった。一方、池畑第1・2号住居址は地床炉である。第1号住居址は北側柱穴間、第2号住居址は住居址中央に位置する。

このように、住居の平面形、炉をみても一様の変化として把握できない。あるいは、こうした点は、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の複雑な様相を示しているのかもしれない。

墓制

瀧の峯古墳群を除くと現在知られているのは周溝墓のみである。周溝墓については、青木和明氏の論考、⁽²¹⁾ 西裏・竹田峯遺跡での考察(三石 1986)⁽²²⁾があり、ここでは立地を中心に述べる。

佐久平で最も早い例は、周防畑B遺跡2号周溝墓である。また、千曲川流域においても確実な例では最古に位置付けられている。

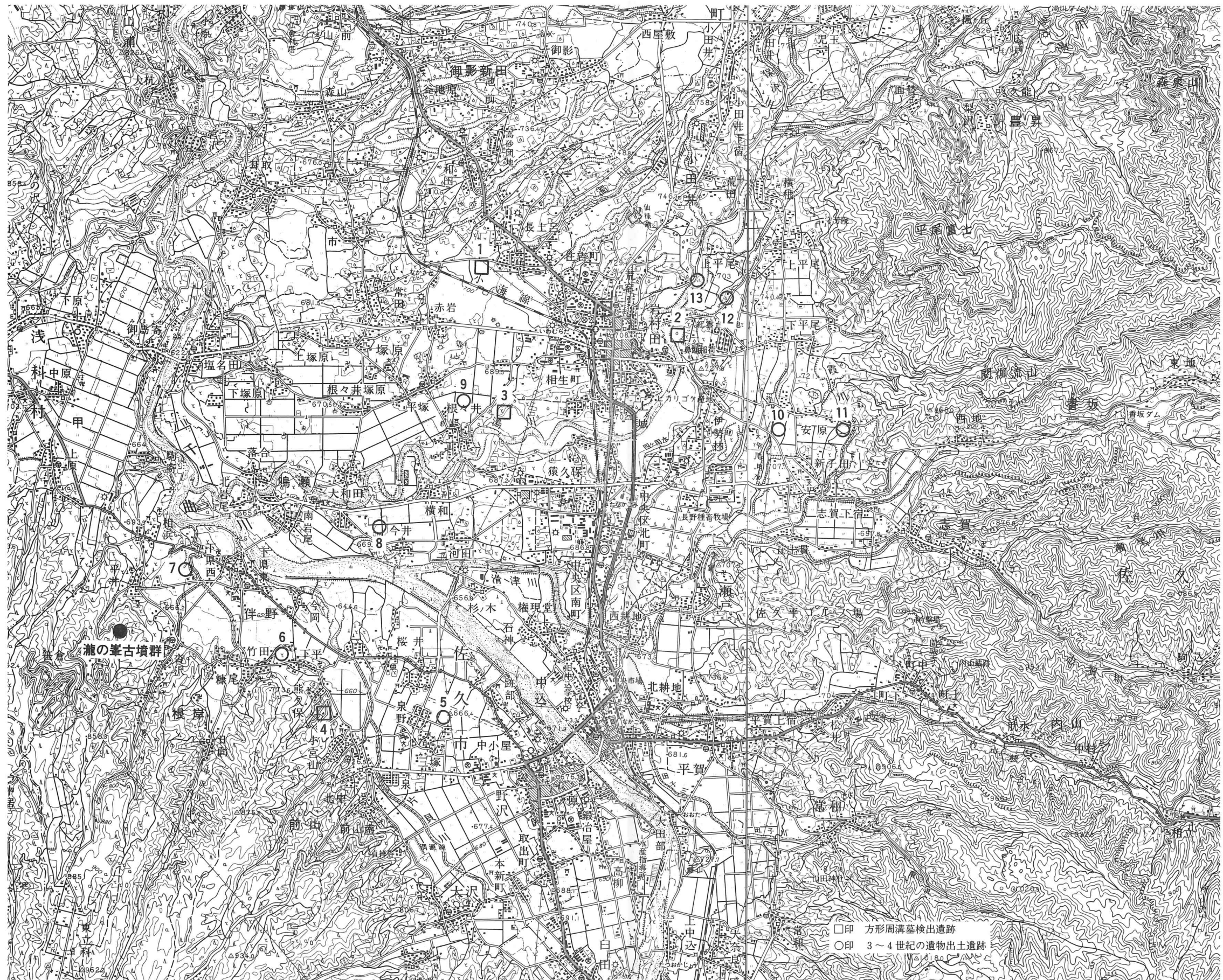
後沢遺跡では、台地上に32棟の住居址とともに3基の周溝墓が検出された。うち2基は保存され時期が明確でないが、住居址と同時期と考えて良いだろう。

小諸市久保田遺跡は千曲川をのぞむ河岸段丘上に位置し、3基の周溝墓が検出された。3基とも重複関係があり、3号→2号→1号の順に構築されていた。出土土器からすると3基の時間差はあまり認められない。

下小平遺跡は、湯川東岸の河岸段丘上に位置する。後期の住居址のほか、時期はややずれるが、2基の周溝墓が検出されている。

このように、立地として集落内に周溝墓が依然として構築されている。したがって、墳墓だけが尾根上に構築される瀧の峯古墳群の在り方とは全く様相を異にしている。換言するなら、瀧の峯古墳群とほぼ同時期においても、異なった立地で、異なった墓制が現われてくると言えよう。

(花岡 弘)



第4図 佐久市内方形周溝墓検出遺跡・3~4世紀の遺物出土遺跡分布図

第2表 佐久市内方形周溝墓検出遺跡・3～4世紀の遺物出土遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺物	備考
1	7-2	周防畑B遺跡	長土呂字大豆田・下仲田・上仲田	弥生時代後期中葉		昭和55年度発掘調査
2	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	弥生時代終末 ～古墳時代初頭		昭和55年度発掘調査
3	98	北西ノ久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	弥生時代後期前半?	方形周溝墓 1基	昭和57・60年度発掘調査
4	400	後沢遺跡	小宮山字後沢	弥生時代後期 箱清水式期	方形周溝墓 3基	昭和51・52年度発掘調査
5	418	市道遺跡	三塚字市道	古墳時代前期	S字状口縁台付甕	昭和49年度発掘調査
6	317	西裏・竹田峯遺跡	根岸字竹田峯、伴野字西裏	古墳時代前期	住居址 1棟、溝 1基	昭和60年度発掘調査
7	220	舞台場遺跡	根岸字反り田	古墳時代前期		昭和56年度発掘調査
8	234	今井西原遺跡	今井字九反田他	古墳時代前期	住居址 1棟	昭和49年度発掘調査
9	92-2	餅田遺跡	岩村田字堰向	古墳時代前期	S字状口縁台付甕	昭和48年度発掘調査
10	130	池畑遺跡	安原字池畑	弥生時代終末 ～古墳時代初頭	住居址 2棟	昭和60年度発掘調査
11	133	宿上屋敷遺跡	安原字宿・久保田	古墳時代前期	住居址 2棟	昭和60年度発掘調査
12	46	腰巻・西大久保遺跡	上平尾字腰巻・西大久保	古墳時代前期	住居址 5棟	昭和62年度発掘調査
13	10	栗毛坂遺跡(A・B地区)	岩村田字栗毛坂	古墳時代前期	住居址 2棟	昭和62年度、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査

- 註(1) 川島雅人・前原 豊 1978 「1 岸野榛名平遺跡の調査」 『佐久考古』No.4
- 註(2) 林 幸彦 1982 「後沢遺跡」 『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』
- 註(3) 佐久市教育委員会 1983 『中村』
- 註(4) 佐久市教育委員会 1983 『舞台場』
- 註(5) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
- 註(6) 註5に同じ
- 註(7) 佐久市教育委員会 1972 『佐久市所在埋蔵文化財調査報告書——昭和46年度——』
- 註(8) 註7に同じ
- 註(9) 註7に同じ
- 註(10) 林 幸彦 1982 「石附製炭窯跡」 『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』
- 註(11) 土屋長久・武藤 金 1978 「2 岸野休石遺跡の調査」 『佐久考古』No.4
- 註(12) 花岡 弘 1986 「土師器の成立の古墳時代」 『歴史手帖』第14巻第2号
- 註(13) 小山岳夫 1987 「西一里塚遺跡の外來系土器——西一里塚遺跡採集の棒状浮文土器をめぐって——」
『長野県考古学会誌』第53号
- 註(14) 佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
- 註(15) 小諸市教育委員会 1984 『久保田』
- 註(16) 註5に同じ
- 註(17) 望月町教育委員会 1983 『後沖遺跡』
- 註(18) 森嶋 稔 1978 「第3章 弥生式時代」 『更級埴科地方誌 第2巻 原始古代中世編』
- 註(19) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『池畑・西御堂』
- 註(20) 林 幸彦・花岡 弘 1983 「弥生時代の炉——千曲川流域を中心として——」
『信濃』第35巻第4号
- 註(21) 青木和明 1984 「長野県における周溝墓の変遷」
『第5回 三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 註(22) 註5に同じ

第III章 基本層序

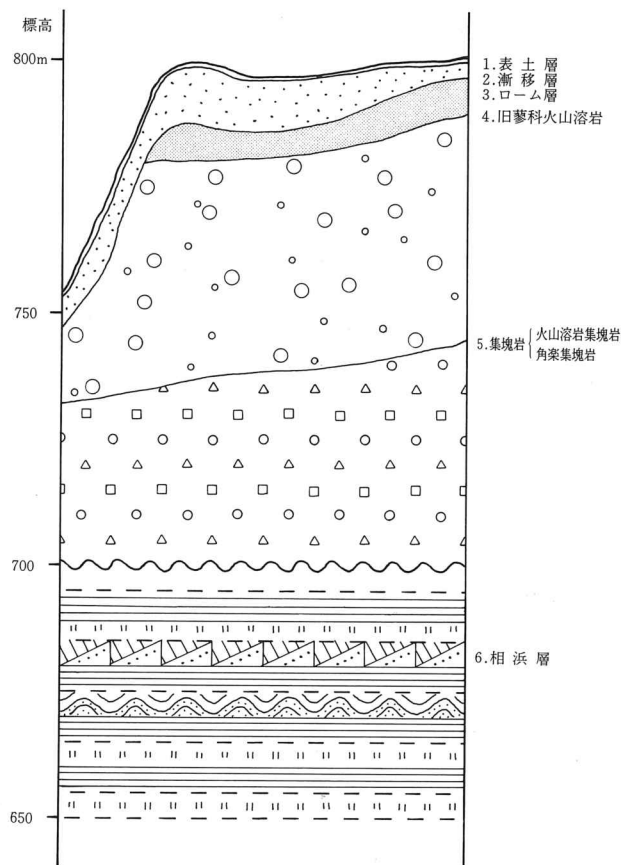
第1節 基本層序

瀧の峯古墳群近傍の地質地層断面柱状図作製については、この付近は緩斜地帯が多く、雑木林赤松その他草木が繁茂し地層の露出個所が極めて少なく河川沿いの崖地・大小の道路工事による切りくずし面、直接には今回の古墳発掘調査現場等の観察に基づく資料が僅かに得られたのみであるので、旧岸野村誌編集のための調査資料、南佐久郡地質誌記載事項とを合せて、広範囲の地域調査資料を構成してこの地層柱状図は組立てたものである。

因に前記資料の調査編集はすべて筆者自身によって行ったもので、記載資料・実物標本・写真等は手許に保存してある。

この地帯の層序は最上部から(1)表土・(2)漸移層とそれより下部は蓼科火山系の(3)ローム層、(4)蓼科山溶岩層、その下に火山初期の火山活動噴出物の厚い(5)集塊岩二層、最下部に(6)の相浜層の淡水湖堆積物が基盤をなしており、新生代第四紀洪積初期の地層であることが産出化石によって証明されている。

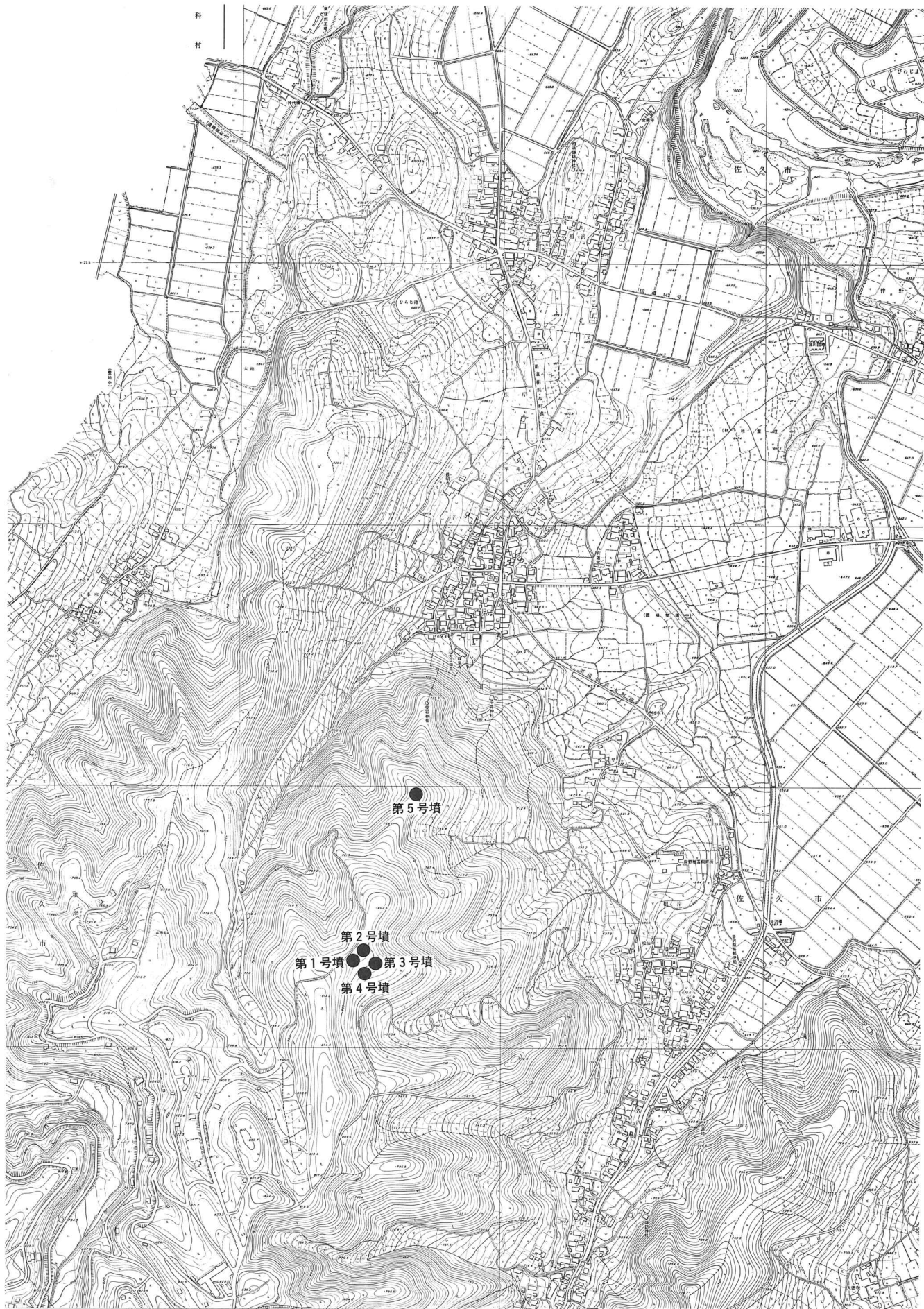
(白倉盛男)



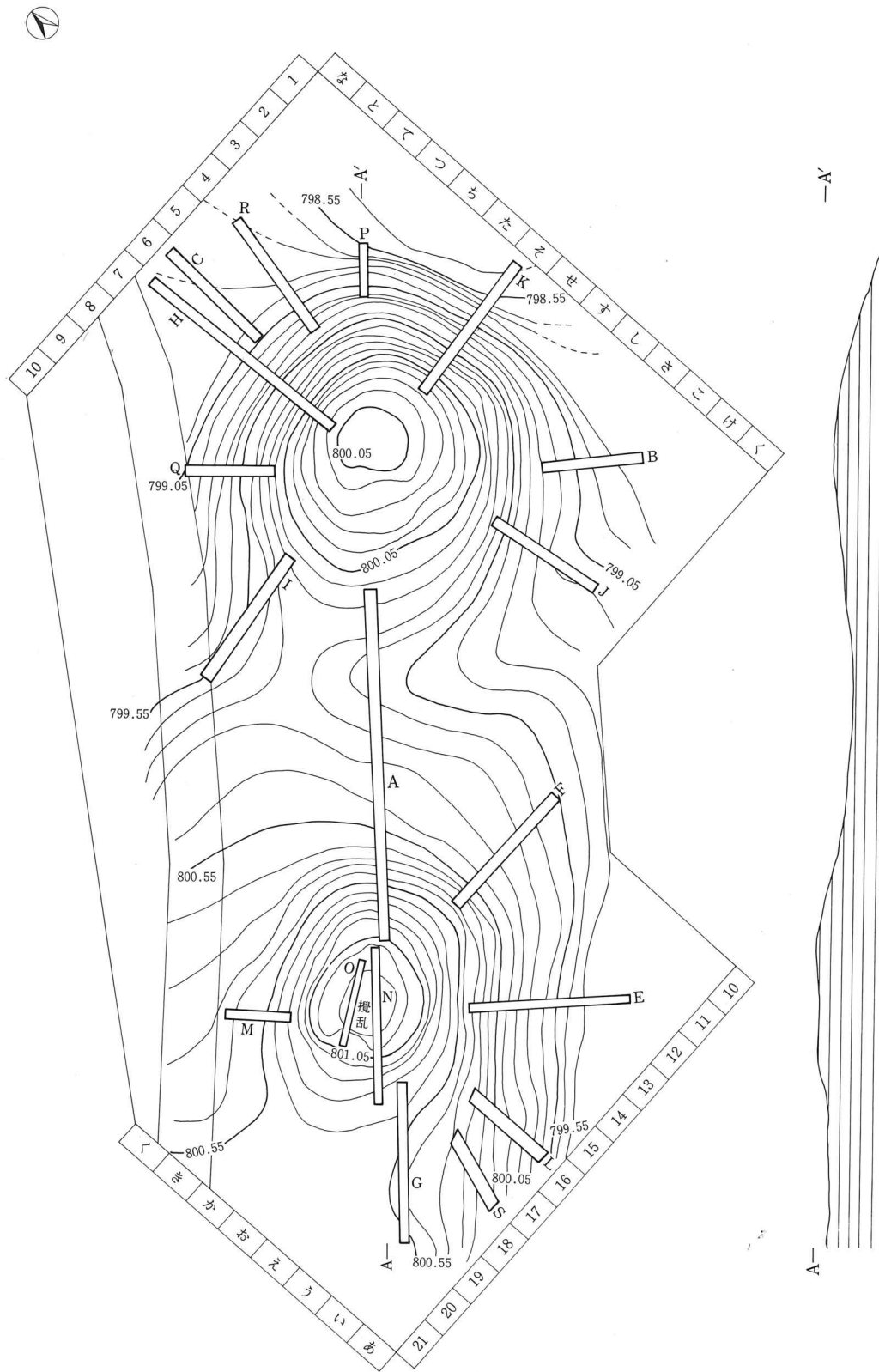
第5図 瀧の峯近傍地層柱状図

第3表 地層柱状図解説表

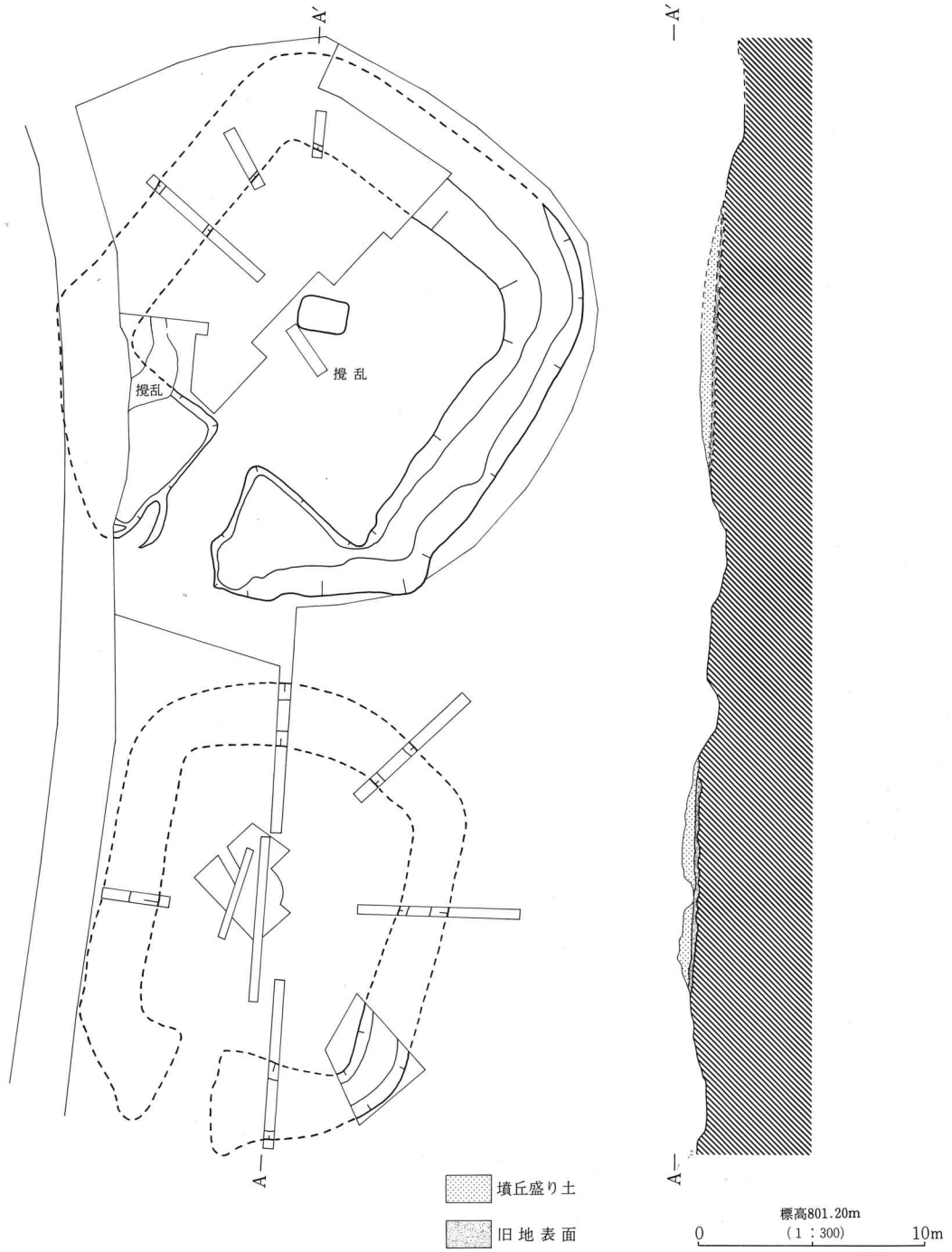
番号	地層名	地層構成	層厚	特記事項
(1)	表土層	腐植土とローム	20~30cm	暗褐色、水分を含むとべたつくが乾くとポロポロした黒ぼく土。
(2)	漸移層	分解腐植土とローム	20~30cm	黄褐色、水分を含むとべたつくが乾くとポロポロした黒ぼく土。
(3)	ローム層	火山灰、火山砂浮石の風化分解物	20~10m	淡黄赤色、風化して粘土化、粘着力大。風化して鹿沼土の部分あり(浮石多量)。
(4)	旧蓼科火山溶岩層	輝石安山岩(多) 角閃安山岩(稀少)		この付近には露頭なし、地中に存在する可能性あり。
(5)	集塊岩層	火山溶岩と集塊岩 角礫集塊岩	40m+ 30m+	比較的高所に露出、安山岩の大礫も含む。円礫多、灰褐色。谷底部底地に露出、角礫を含み豆とじ式に見える。暗褐色。層をなして岩穴を作っている部分あり、透水層、基底礫岩、下部に湧泉。
(6)	相浜層	凝灰質砂岩、凝灰岩 凝灰頁岩、礫質凝灰岩の互層	50m+	千曲川沿い平坦地基盤に分布、象歯鹿角、植物化石を含む。層間褶曲、偽層あり。



第6図 瀧の峯古墳群付近の地形図 (1 : 10,000)



第7図 瀧の峯1・2号墳墳丘測量図及びトレンチ設定図



第8図 瀧の峯1・2号墳墳丘平面図

第IV章 遺構と遺物

第1節 古墳と出土遺物

1) 瀧の峯1号墳

遺構(第9・10図、図版 三~五)

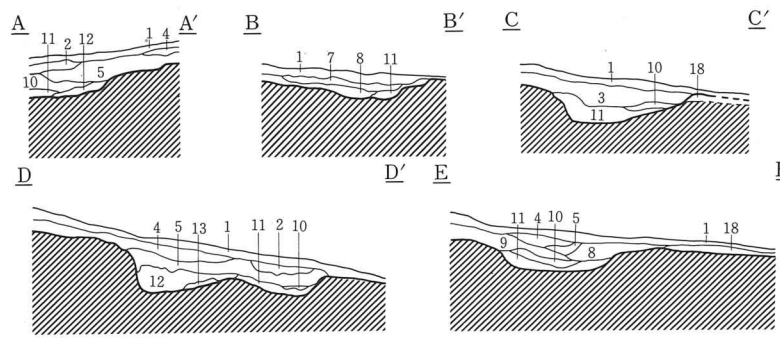
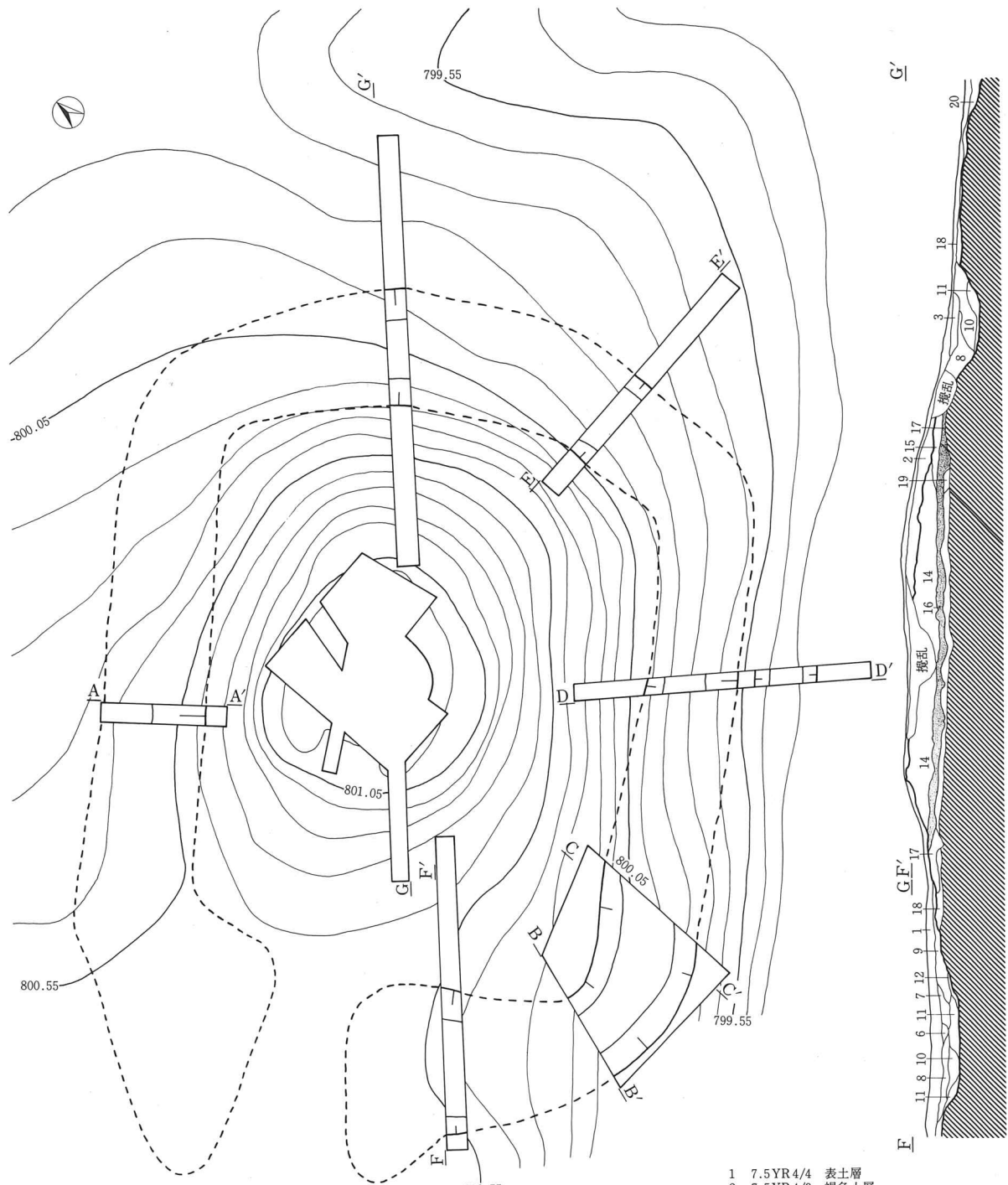
瀧の峯1号墳からは、昭和49年に炭焼き作業の際に鉄剣と鉈と思われる鉄製品が出土しており、2号墳と併せて佐久地方において初見の前方後円墳ではないかと注目されたことがある。その後、地形測量が行われ、前方後円墳でないことは明らかとなったが、佐久地方最古の古墳の一つであろうと位置づけられた。

調査は墳丘の形態を明らかにするために、墳丘及び周囲の樹木を伐採して、10cmコンターで地形測量を行うことから始めた。測量の結果、現状で約15×13mの北東方向にやや長い楕円形を呈しており、高さは1.3mを測ることが明らかとなった。そこで墳形及び周溝を確認するために、墳丘の周囲に7本のトレンチを設定して周溝の立ち上がりを確認した。その結果、墳形は、突出部が存在すると推定される墳丘の西辺部が未確認であるため断定はできないものの、周溝の開き具合や地形の状況などから、2号墳と同様な前方後方型を呈するものと考えられる。墳丘の規模は、トレンチによって確認された部分で、長さ13.5m、幅10.5m、高さ1.3mを測る。全長は突出部の部分が未調査であるため明確ではないが、2号墳とほぼ同規模の18m前後を測るものと推定される。

今回行った調査の当初の目的は、墳丘の構築過程を明らかにすることではなく、墳形及び周溝の確認を目的としたものであるが、主体部が攪乱によって大半が破壊されていることが確認されたため、墳丘中央部をトレンチによって立ち割り、盛り土部分の観察を行った。その結果、ローム層直上に旧地表面の黒褐色土層(16・17層)が認められた。この層は、周溝の外側及び2号墳墳丘ローム層直上においても存在することから、旧地表面と考えてよいものであろう。墳丘はこの旧地表面である黒褐色土層上にローム粒子を主体として、粘性・しまりを有する褐色土層(14・15層)を盛り土して構築されており、残存する最も厚い部分で約60cmを測る。

周溝はトレンチによって確認されたのみであり、さらに北辺部は未確認であるため明確ではないが、東辺部で幅2.8m、南辺部で2.5m、南西コーナー部で2.1~2.4m、突出部が存在すると考えられる西辺部が最も広く3.5mを測り、2号墳と同様に、突出部の前端を除いて全周するものと想定される。深さは、突出部付近となる西辺部が40cmと最も浅く、他の三辺は60~70cmを測る。周溝の立ち上がりは、西辺部の内側を除いて比較的急傾斜で立ち上がるが、特に南辺部内側についてはその傾向が顕著であり、ほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。周溝の堆積土は、基本的に、墳丘側から墳丘崩壊であるローム粒子を多量に含んだ褐色土層(11・12層)、暗褐色土層(3・6・7・9層)、黒褐色土層(10層)が流れ込み、外側から極暗褐色土層(8層)が堆積し、その上に表土層(1層)が存在する。

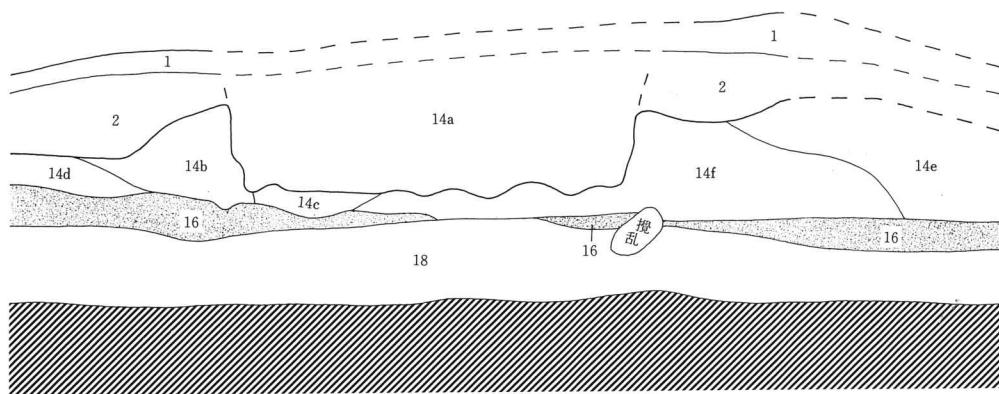
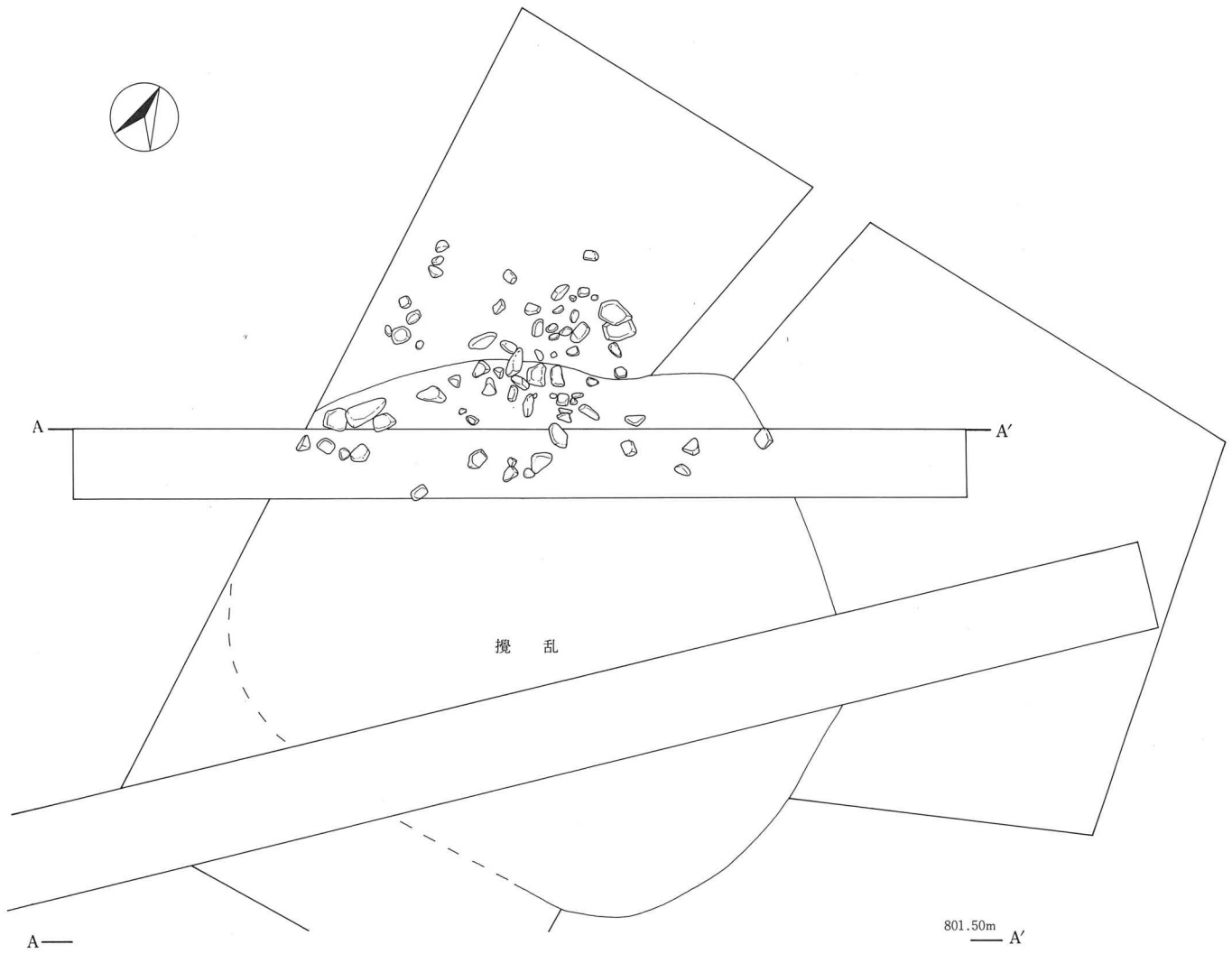
墓壇は、炭焼き作業の際に既に大半が破壊されており、北側の部分がわずかに残存するのみである。墳丘のほぼ中央に位置するが、残存部が極くわずかであることと、今回の調査の目的が確認のみで解体しないことを原則として行ったため形態・規模及び主軸方位等については不明であるが、土層断面及び2号墳より検出された墓壇により、構築順序などについては若干の観察を行うことができた。墓壇の構築は、旧地表面上の盛り土を土坑状に掘り下げることから開始される。この段階の土壇の壁面は、ほぼ垂直に近い急傾斜で立ち上がり、土層断面では160cmの幅を有する。また、底面は10cm前後の盛り土を残しており、旧地表面には達していない。さらに次の段



- | | | | |
|----|----------|--------|--------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4 | 表土層 | |
| 2 | 7.5YR4/3 | 褐色土層 | |
| 3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土層 | ローム粒子含む。
粘性あり。 |
| 4 | 7.5YR4/6 | 褐色土層 | 3層に類似するが、
より多くローム粒子
を含む。 |
| 5 | 7.5YR4/3 | 褐色土層 | 3層に類似するが、
より多くローム粒子
を含む。 |
| 6 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土層 | |
| 7 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土層 | しまりなし。 |
| 8 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土層 | 粘性あり。 |
| 9 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土層 | |
| 10 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土層 | |
| 11 | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子を多量に
含む。 |
| 12 | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子を多量に
含む。 |
| 13 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土層 | 粘性あり。 |
| 14 | 7.5YR4/6 | 褐色土層 | 墳丘盛り土。 |
| 15 | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | 墳丘盛り土。 |
| 16 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土層 | 旧表土。 |
| 17 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土層 | 旧表土。 |
| 18 | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム漸移層。 |
| 19 | 7.5YR4/3 | 褐色土層 | ローム漸移層。 |
| 20 | | | 2号墳2層。 |

標高800.90m
(1:150) 10m

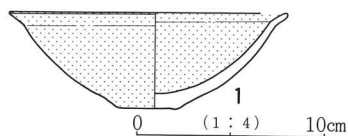
第9図 瀧の峯1号墳墳丘測量図及びトレンチ設定図



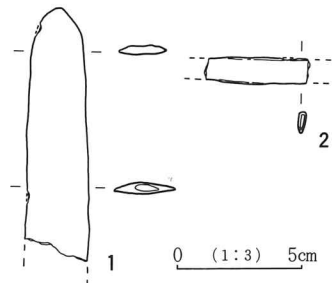
- | | | | |
|-----|----------|-------|-------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4 | 表土層 | |
| 2 | 7.5YR4/3 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。 |
| 14a | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墓壇構築土。 |
| 14b | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墳丘盛り土。 |
| 14c | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墳丘盛り土。 |
| 14d | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墳丘盛り土。 |
| 14e | 7.5YR4/6 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墳丘盛り土。 |
| 14f | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム粒子主体。しまり、粘性あり。墳丘盛り土。 |
| 16 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土層 | 旧表土。 |
| 18 | 7.5YR4/4 | 褐色土層 | ローム漸移層。 |

0 (1 : 30) 1m

第10図 瀧の峯1号墳墓墳実測図



第11図 瀧の峯1号墳出土土器実測図



第12図 瀧の峯1号墳出土鉄製品実測図

階で、径10cm内外の円礫を多量に含み、粘性のある褐色土を土壌壁及び底面に貼って形成される。墓壇の上面は既に削平されており不明である。

遺物の出土状況

今回の調査は、トレンチにより墳形及び周溝の確認を行ったのみであるため、遺物の出土量は極めて少ない。南東コーナー付近Fトレンチより鉢(11-1)が1点出土しているが、他は、墳丘南辺部付近に設定したEトレンチ、Fトレンチ、S・Lトレンチ拡張部より、無彩の壺と思われる小片、細片のため器種は不明であるが赤色塗彩の施された土器片などが少量出土しているのみである。

墓壇からの出土遺物は、昭和49年に炭焼き作業の際に出土したとされている鉄剣(12-1)と不明鉄製品(12-2)があるが、今回の調査では、攪乱内により縄文時代前期中葉関山式に比定される深鉢の胴部片(22-3)

第4表 瀧の峯1号墳出土土器観察表

挿 番 号	器 種	部 位	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
11-1	鉢	口~底	14.7 5.0 3.3	口辺部内弯外傾、口縁部内面僅かに稜をなし、外反する。	内外面共に赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) Fトレ 回転実測A

が混入遺物として出土したのみである。

遺物(第11・12図、図版 十一・十二)

今回の調査により検出された遺物は土器のみであり、そのうち図化し得たものは11-1の鉢形土器1点のみである。

11-1は鉢形土器で、体部は内弯して立ち上がり、口縁部は内面にわずかに稜を有して外反する。口径14.7cm、底径3.3cmと口径に比して底径が小さく、内外面とも赤色塗彩が施されている。この他、小片のため図示し得なかったが、内面にハケメ調整の施された壺の胴部片、赤色塗彩の施された小片が少量出土している。

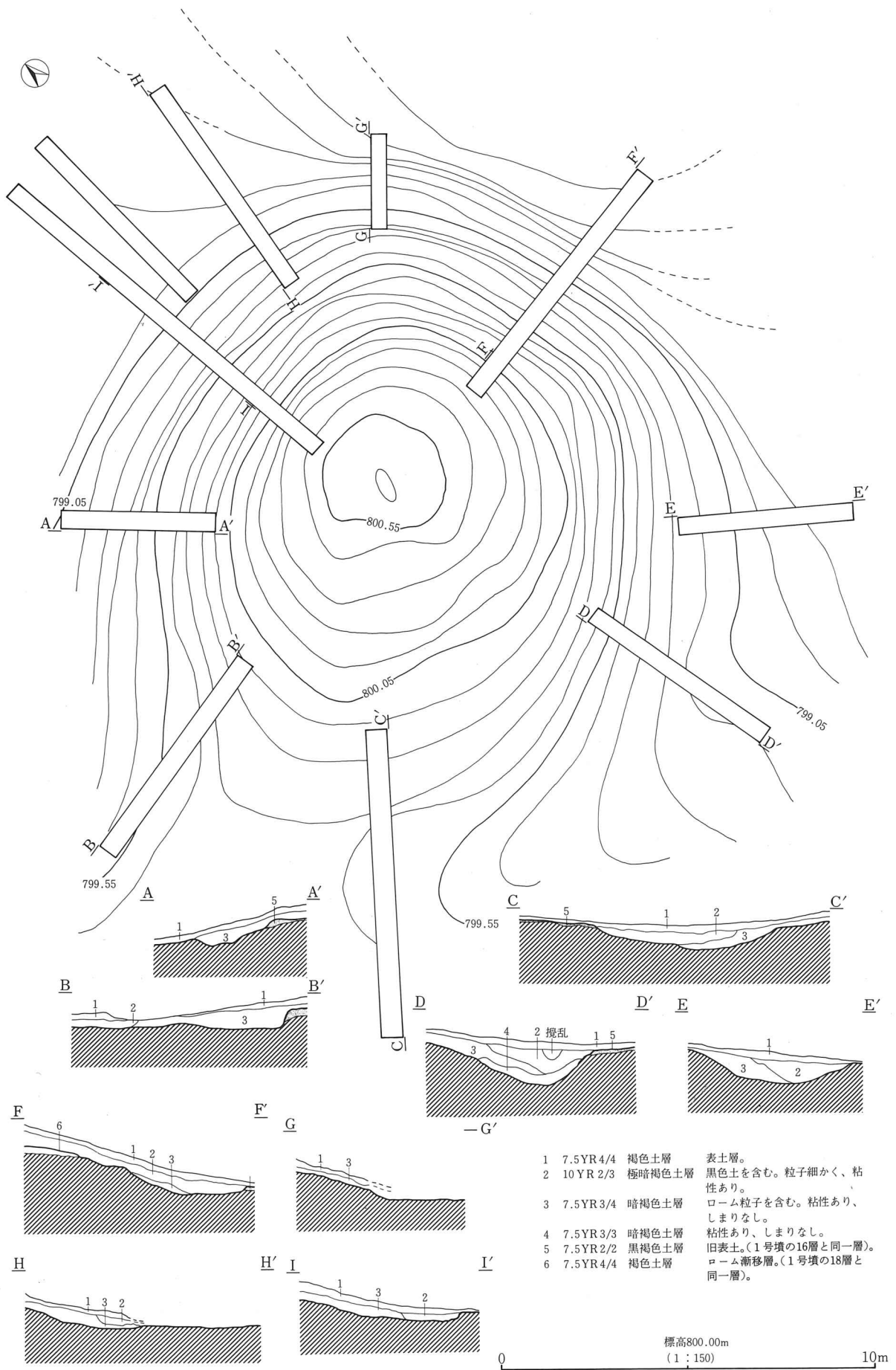
既出遺物としては、鉄剣と不明鉄製品が出土している。鉄剣(12-1)は剣先部分のみで、残存身長10.0cm、最大幅2.5cm、身厚0.6cmを測るが、錆の付着が著しく鎬等の観察は困難である。12-2は小片のため性格は不明であるが、鉈状の鉄製品であると考えられる。(三石)

2) 瀧の峯2号墳

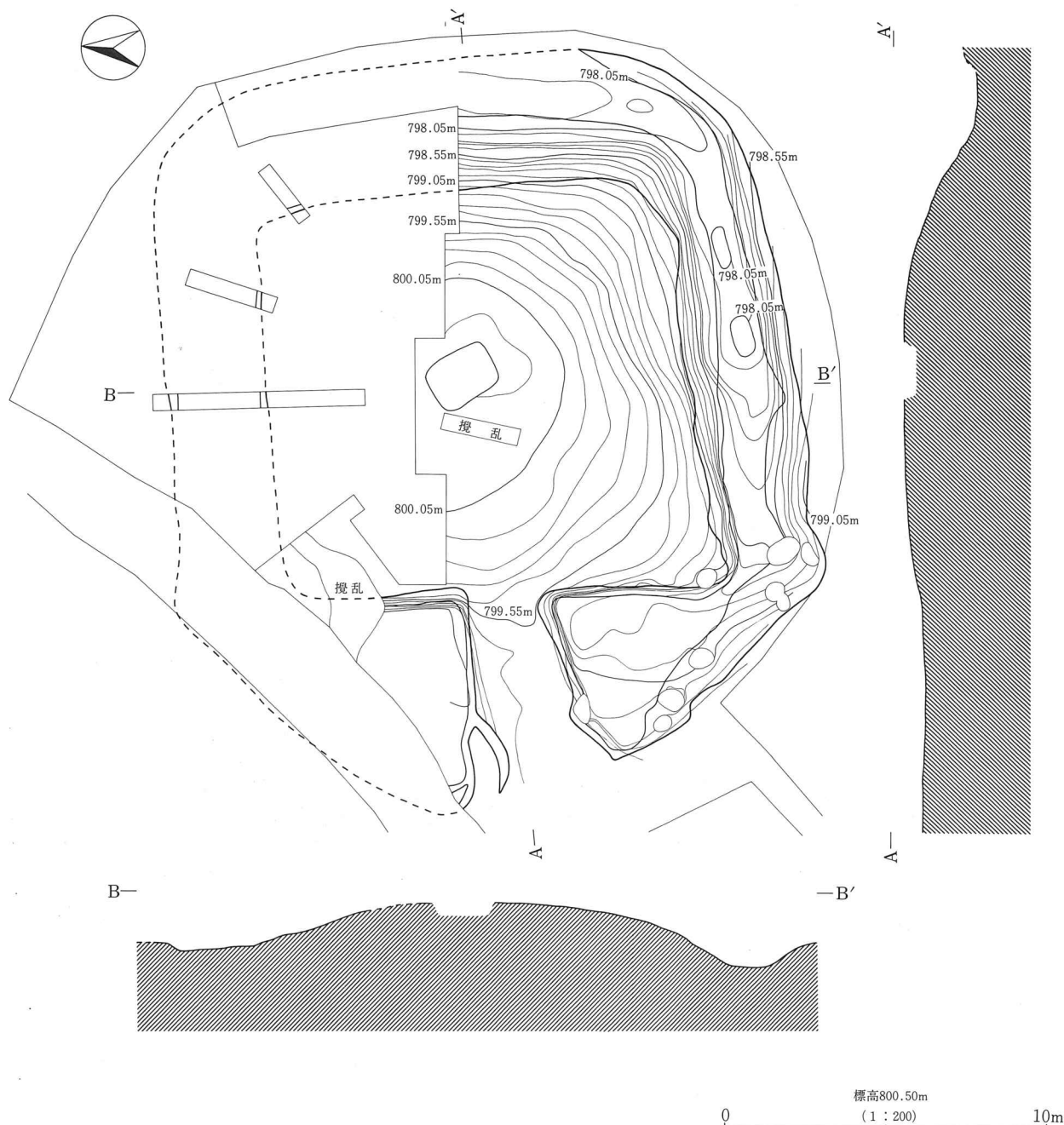
遺構(第13~17図、図版 五~十)

瀧の峯2号墳は、1号墳の北側に隣接して存在しており、墳丘部に攪乱を受けた様子がなく、墳丘及び墓壇が良好な状態で残存していることが予想された。

調査は1号墳と同様、墳丘の形態を明らかにするために、墳丘及び周囲の雑木を伐採して、10cmコンターで地形測量を行うことから開始した。その結果、現状で径約18mのほぼ円形を呈しており、高さ1.8m、墳頂部の標高は800.6mを測ることが明らかになった。今回行った調査の当初の目的は、墳丘形態・周溝及び主体部の確認であるため、墳丘の周囲に10本のトレンチを設定して掘り下げを行ったが、墳丘西側に設定したAトレンチ内より、18-1の壺形土器が出土したことから、本古墳の築造年代を決定する資料になり得ると考えられる遺物が周溝内



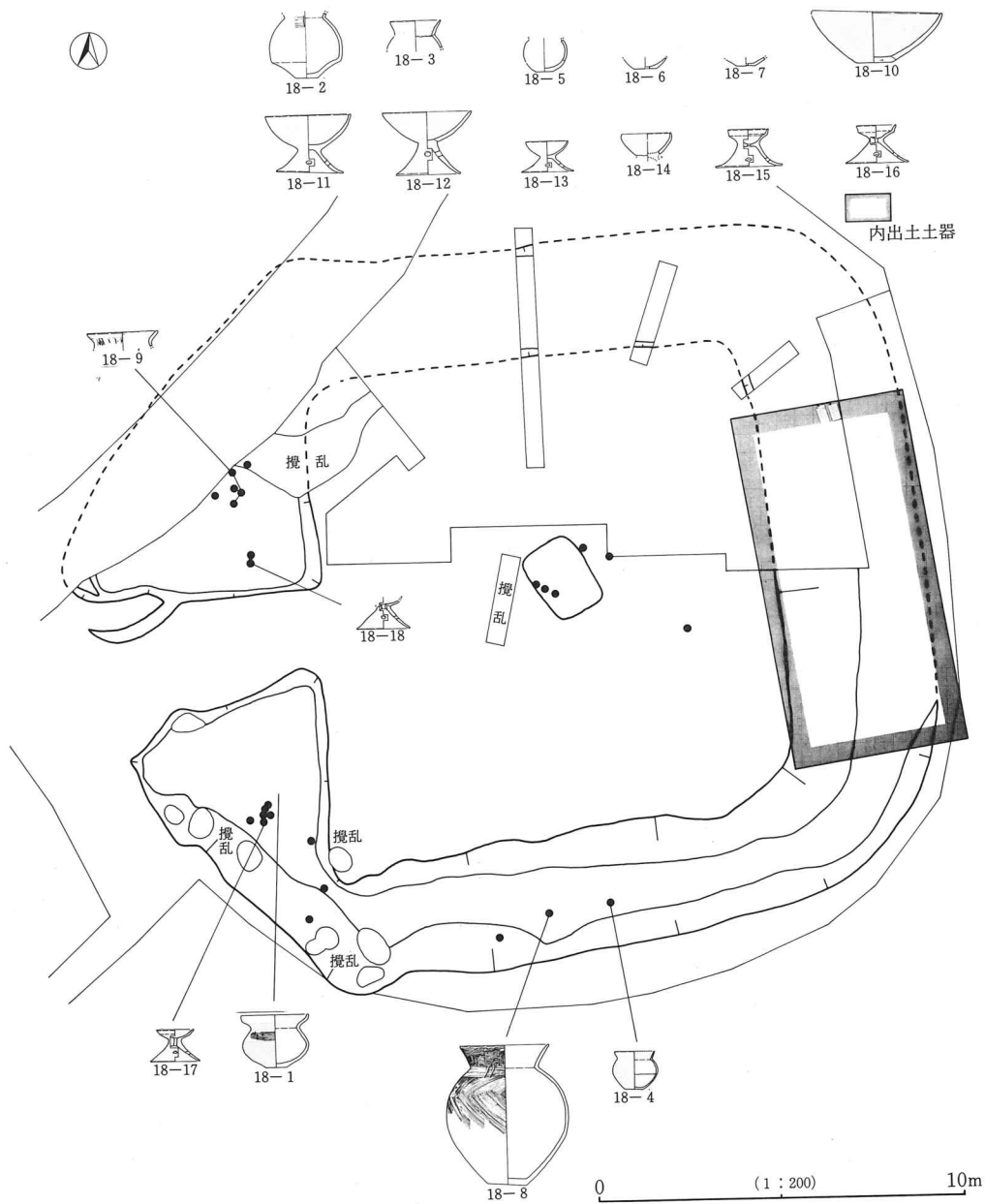
第13図 瀧の峯 2号墳墳丘測量図及びトレンチ設定図



第14図 瀧の峯 2号墳平面図

に存在することが予想され、周溝の発掘調査によって規模・墳形・周溝の範囲などを確定し、古墳に伴う土器を検出することは、佐久地方最古とされる本墳の性格を明らかにする上で必要なことであるとの判断から、比較的遺存状態の良好と思われる南半部について、墳丘部のストリップ及び周溝の掘り下げを行った。調査の結果、平面形態は前方後方型を呈しており、方形の主丘部西辺部に撥形にのびる前方部状の突出部を有し、周溝は、突出部前端のみを残して全周していることが明らかとなった。

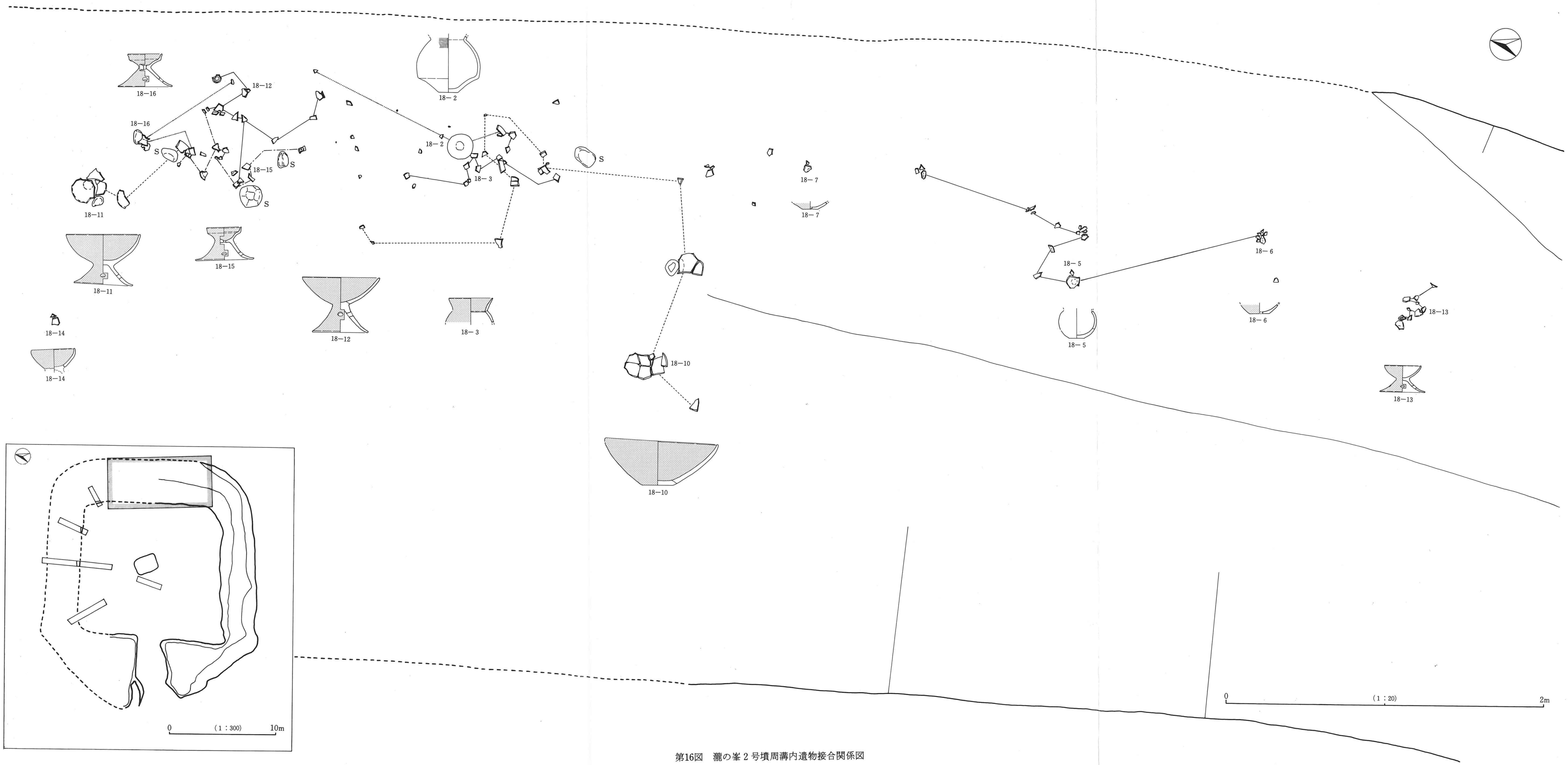
墳丘の規模は、全長18.3m、主丘部の長さ12.6m、幅13.0m、高さ1.3m、括れ部からの高さ0.6mを測り、突出部は、長さ5.7m、括れ部の幅2.5m、前端部の幅4.5mを計測する。墳丘は、旧表土（5層）を残したまま地山を削り、方形に整えた後盛り土を行っている。今回の調査の目的が確認のみで解体しないことを原則として行ったため、墳丘を立ち割ることはしなかったが、墓壇の西側に攪乱溝が深く掘られており、その断面によって盛り



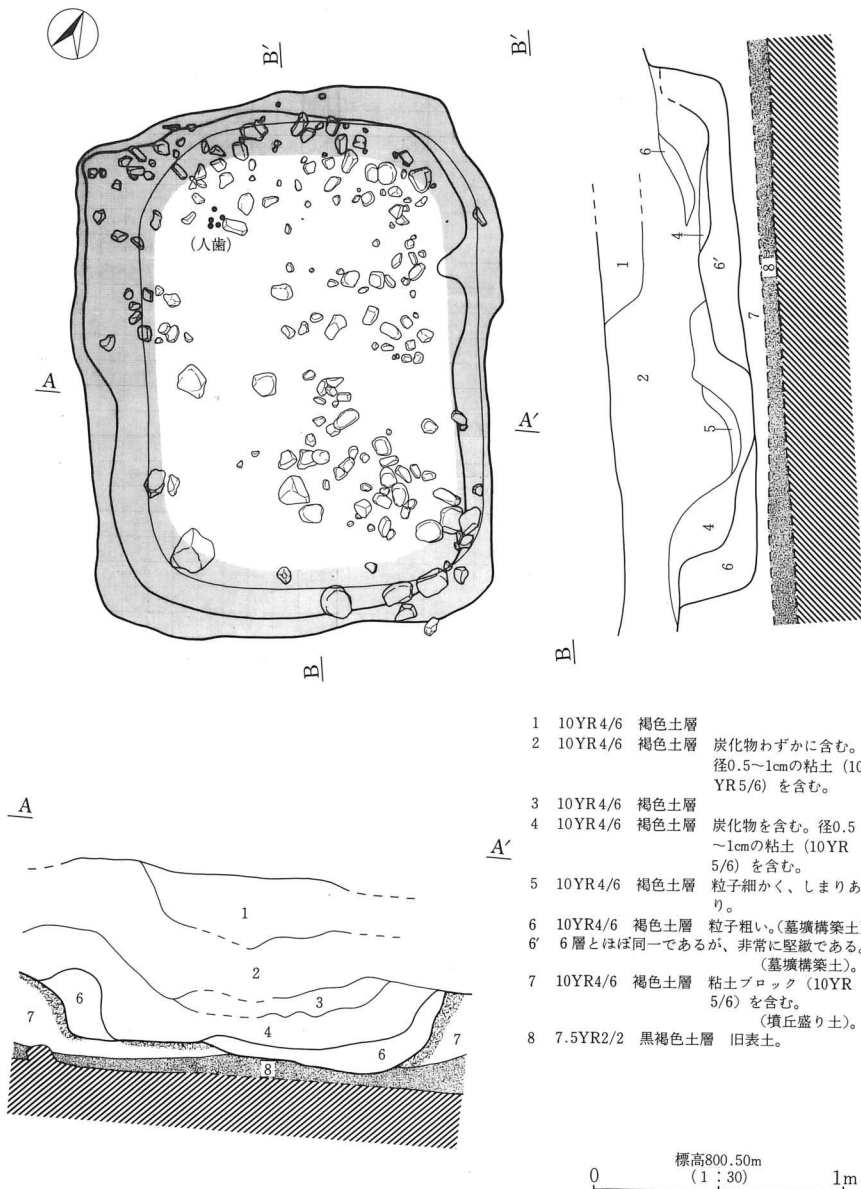
第15図 瀧の峯2号墳遺物分布図

土の観察を行うことができた。盛り土は残存する最も厚い部分で約60cmを測り、旧表土の上部から1号墳と同様に、ローム粒子を主体として、粘性のある褐色土が盛られている。突出部は、地山のローム層を削り出して造り、突出部前端の整形は認められない。

周溝は東側でやや不明瞭となるものの、突出部前端を除いて全周する。幅は、墳丘西辺部（突出部付近）で最も広く5.7m、東側で3.0~3.4mを測り、深さは突出部付近で40cmと浅く、東側で約1mを測る。断面形は「U」字状を呈するが、墳丘西辺部の内側と突出部両側面は垂直に近い急傾斜で立ち上がる。周溝を含めた規模は、東側で周溝が不明瞭となるため明確ではないが、全長23.5m、幅19.5m前後を測るものと思われる。周溝底のレベルは、主丘部西側、突出部付近が最も高く、東側に向って徐々にレベルを低下させており、溝底の比高差は1.2mを測る。このことは地形が西から東へ緩く傾斜していることに相応する。主丘部の周溝底からの見かけの高さは、西側突出部付近で約1m、最も低い東側溝底から望むと2.2mの高さを計測する。周溝の堆積土は、墳丘側から墳丘崩壊土であるローム粒子を多量に含んだ暗褐色土（3層）が流れ込み、さらに、粒子細かく粘性のある黒褐色



第16図 瀧の峯2号墳周溝内遺物接合関係図



第17図 瀧の峯2号墳墓壇実測図

遺物の出土状況

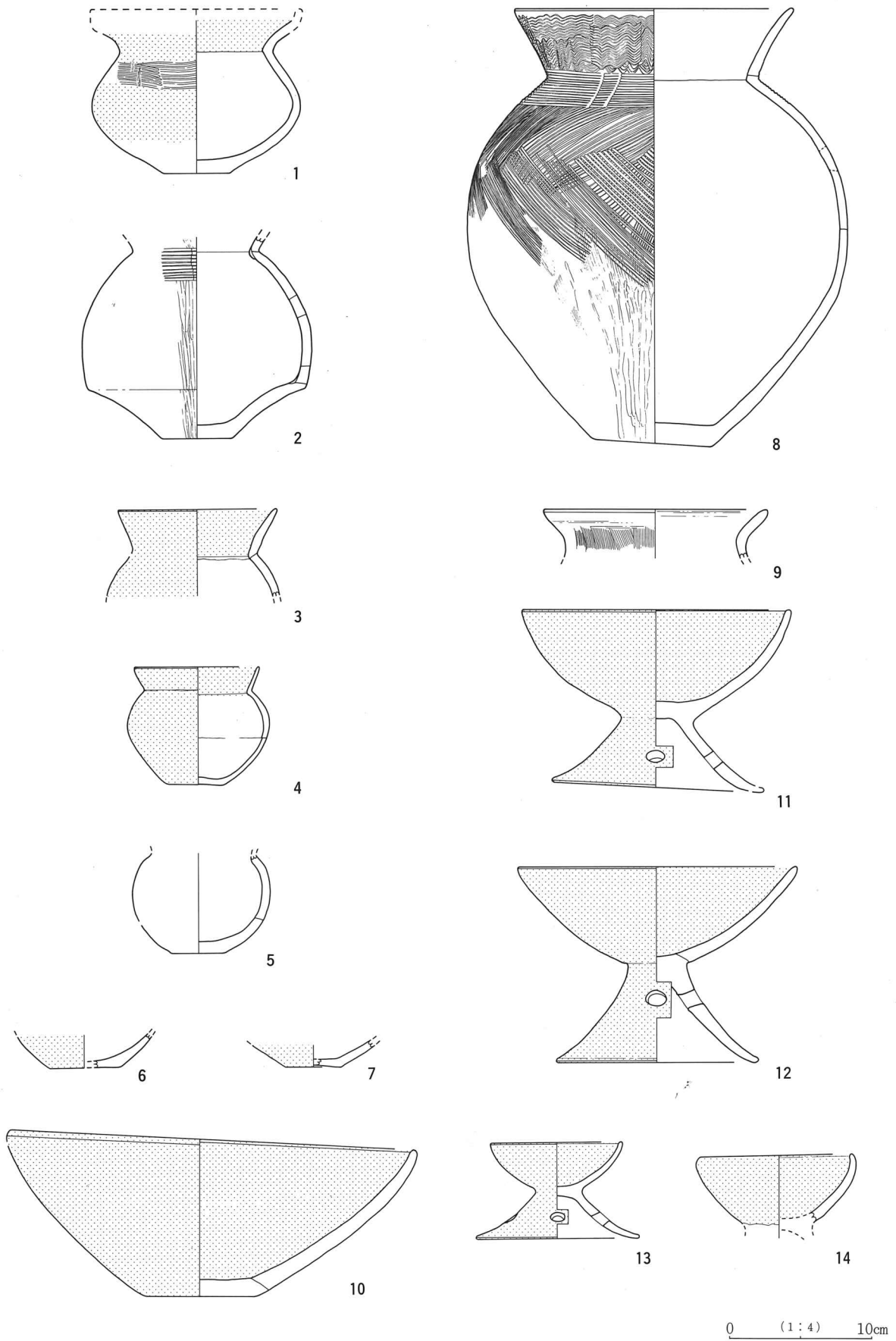
本墳からは比較的まとまった量の遺物が出土している。土器はほとんど周溝内より出土しており、西側周溝、突出部付近及び南側の周溝からも遺物の出土はみられるが、特に東側の周溝内に集中する傾向が認められる。東側周溝内の遺物出土状況は第15図瀧の峯2号墳周溝内遺物接合関係図に示したが、実測し得たもので、壺が5点 (18-2・3・5・6・7)、鉢 (18-10)、高坏4点 (18-11~14)、器台2点 (18-15・16) の12点が出土している。各土器は、周溝の底面及び底面付近で、逆さにつぶれたり、破片の散乱した状態で出土しており、墳丘上から転落した様相を示している。

南側の周溝内より出土した土器は、小型壺 (18-4) と甕 (18-8) の2点である。18-8は周溝底面より横転した状態で出土しており、18-4は底面よりやや浮いた状態で出土した。この土器も上方から転落したものと考えられる。

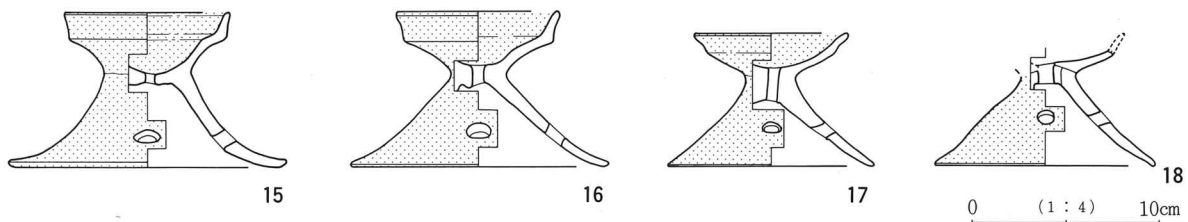
人の歯は総数で10個出土した。そのうち出土地点の明らかな5個は全て墓壇内北西隅、第4層最下部より出土しており、北側に頭部が置かれたものと考えられる。

土 (2層) が堆積し、その上に表土層 (1層) が10~20cm前後の厚さで存在する。

墓壇は、墳丘中央より北・東へそれぞれ1m寄った位置から検出された。墓壇の中軸線は、墳丘の中軸線とは直交せず、N-28°-Wを示す。墓壇の構築は、旧地表面上の盛り土を南北2.2m、東西1.7mの長方形の土坑状に掘り下げることから開始される。深さは現状で約35cmを測る。この段階の土層の壁面は垂直に近い急傾斜で立ち上がり、壁面及び底面に堅く踏み固められた部分が認められる。底面はほぼ平坦に掘り窪められており、一部旧地表面にまで達している部分が観察された。さらに次の段階で、地山に含まれている径10cm前後の円礫を核にした褐色土を土層の壁面及び底面に貼って墓壇が形成される。この段階で、南北185cm、東西135cmを測る長方形の墓壇が想定される。棺は、土層の観察や墓壇底面の状況からも明確にできなかったが、木棺が想定される。



第18図 瀧の峯2号墳出土土器実測図〈1〉



第19図 瀧の峯2号墳出土土器実測図〈2〉

◎ 遺物（第18～20・22～24図、図版 十一・十二）

①

0(1:1)1cm

第20図 瀧の峯
2号墳出土ガラス
小玉実測図

本古墳からは、比較的まとまった量の土器とガラス小玉・人の歯が出土した。土器の器種には、壺・小型壺・甕・鉢・高坏・器台がある。そのうち図化し得たもので、壺2点、小型壺5点、甕2点、鉢1点、高坏4点、器台4点の18点があり、他にも多量の土器片が出土した。18点のうち14点が赤色塗彩されており、鉢・高坏・器台は全ての個体に赤色塗彩が施されている。

壺には18-1と18-2の2点がある。18-1は胴部最大径に比して器高が低く、胴中央部で強く張る。口縁部を欠損しているが、受口状を呈すると思われる。内面の調整はヘラナデが行われ、口縁部には赤色塗彩が施される。外面は口縁部～頸部、胴中位～底部に赤色塗彩が施され、胴上部には、7本一組の櫛描横走平行線文（左回り）を不揃いに縦に区画した粗雑化されたT字文が施文される。18-2は無彩の壺形土器で、胴下部に弥生時代後期箱清水式期の系譜をひく稜が認められるが、胴上半部が次期的様相を窺わせる球胴形に変化したためか、より下降した位置にある。口縁部を欠くが、頸部で強く屈曲して外傾する単純口縁を有するものと考えられる。頸部に櫛描簾状文が施文され、調整は内外面ともヘラミガキが施されるが粗雑である。

小型壺には18-3～7の5点があり、18-4を除くと全て欠損品である。18-3は、18-4に比して口縁部が長く、直線的に外傾する。内面の調整は胴部ナデ調整、口縁部に赤色塗彩、外面は赤色塗彩が施される。18-4は、口縁部短かく強く屈曲し、やや内弯して立ち上がる。最大径は胴中位に位置する。調整は、外面に赤色塗彩が施されており、内面は胴部にナデ調整、口縁部に赤色塗彩が施される。18-5は無彩の小型壺で、胴部は球胴形を呈し、口縁部を欠く。調整は内外面とも磨滅が著しく不明である。18-6・7は底部片で、外面に赤色塗彩が施される。

甕には18-8・9がある。18-8は球胴形の胴部を有し、最大径は胴中位上方に位置する。口辺部「く」の字状に強く屈曲し、わずかに外反して外傾する。調整は内面に横位のヘラミガキ、外面胴下半部には縦位のヘラミガキが施される。文様構成は、口辺部に櫛描波状文、胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状に施された後に、櫛描簾状文（2連止め）が施文されている。波状文・簾状文ともに右回りで、歯数は14本を数える。このように文様は弥生時代後期的様相の櫛描文が施文されているが、口縁部が強い屈曲をもって立ち上がり、胴部が球胴化した形態は、次期的様相を窺わせるものである。18-9は口縁部のみの資料で、調整は内外面ともヨコナデが行われ外面頸部に縦位のハケメ調整が施される。

鉢は18-10の大型の鉢形土器がある。器肉厚く、体部はわずかに内弯して立ち上がり、内外面とも赤色塗彩が施される。

高坏には、大型の18-11・12と小型の18-13・14がみられる。18-11は、坏部は内弯して立ち上がり腕状を呈し、脚部は「ハ」の字状に開く。脚部のはぼ中位に径1cmの円形の透し孔を3個有する。18-12の坏部も内弯して立ち上がるが、11と比較すると直線的である。脚部は「ハ」の字状に開き、中位やや上方に径1.4～1.5cmの円形の透し孔を3個有する。18-13は小型高坏で、坏部は内弯して立ち上がる腕状を呈し、脚部は「ハ」の字状に大きく開き、坏部径をしのぐ。脚部の透し孔は径1.1～1.3cmを測る。18-14は小型高坏の坏部で内弯して立ち上

第5表 瀧の峯2号墳出土土器観察表

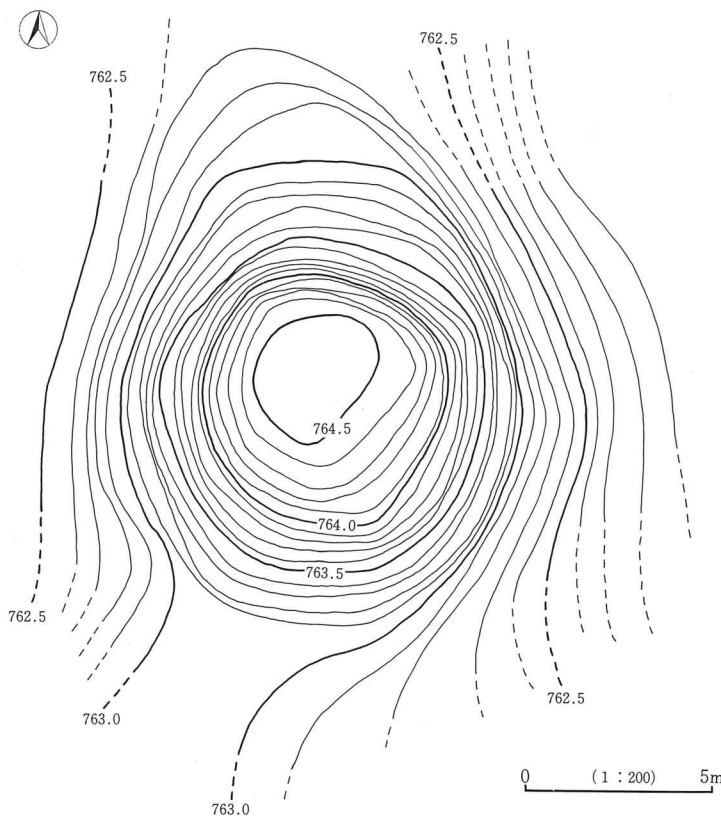
挿 番 号	器 種	部 位	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
18-1	壺	頸 底	— <10.7> 5.2	口縁部受口状を呈すると思われる、胴部ソロバン玉状を呈する。	内) 底部～胴中位雑なヘラナデ、胴中位～頸部丁寧な横位のヘラナデ、口縁部赤色塗彩 外) 頸部7本1組の櫛描横走平行線文(左回り)の後、底部～肩部にかけ赤色塗彩、頸部～口辺部赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) Aトレ、I区 回転実測B
18-2	壺	頸 底	— <14.0> 4.9	底部～胴下位外反し、胴中位下で変換点有する。最大径変換点よりやや上(16.0cm)に位置し頸部に向いやや内傾する。	内) 横位ヘラミガキ 外) 縦位ヘラミガキ 文) 頸部 櫛描簾状文施文。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) No.48・54・55・56・57・67 VI区 回転実測B
18-3	壺	口 胴	11.0 <6.1> —	小型壺、口縁部やや長く、外反気味に立ち上がる。	内) 胴部ナデ調整、口縁部赤色塗彩。 外) 赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) No.42・44～47・49・58・81・82、 VI区 回転実測A
18-4	壺	口 底	8.7 8.3 3.7	小型広口壺、最大径(9.9cm)を肩部強い屈曲をもって直線気味に立ち上がる。	内) 底部～胴部ナデ調整、頸部～口縁部赤色塗彩。 外) 赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) No.74 完全実測
18-5	壺	胴 底	— <6.8> 3.2	小型広口壺。胴部球型を呈する。	内外面、磨滅著しく、調整不明。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) No.110・112・114～116・ 118～121・126・128 V区 回転実測A
18-6	壺	底	— <2.3> (5.0)	小型壺と思われる。	内) 磨滅著しく不明 外) 底、赤色塗彩なし、他は全面赤色塗彩と思われる。	胎土色調10Y R7/4(にぶい 黄褐色) No.105・136、VI区 回転実測B
18-7	壺	底	— <1.5> (3.8)	小型壺。	内) 磨滅著しく不明 外) 底、赤色塗彩なし、他は全面赤色塗彩と思われる。	胎土色調5Y R6/8(橙色) No.130・131、V区 回転実測B
18-8	甕	口 底	19.4 30.5 8.1	胴部球胴型を呈し、最大径(26.7cm)胴中位に位置する。頸部やや強く歪曲し、口縁部外反気味に立ち上がる。輪積み成形。	内) 胴部～口縁部丁寧な横位のヘラミガキ 外) ナデ調整、胴下位、縦位のヘラミガキ 文) 口辺部櫛描波状文、胴上部櫛描斜走直線文、頸部櫛描簾状文(2連止め・右回り)	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) No.155 完全実測
18-9	甕	口 頸	(15.6) <3.3> —		内) ヨコナデ 外) 頸部縦位のハケメ調整、口縁部ヨコナデ	胎土色調10Y R6/6(明黄褐色) No.156・158・159 回転実測A
18-10	鉢	口 底	28.3 12.6 7.5	大型鉢、口辺部内弯外傾し立ち上がる。器肉厚い。	底部外面ヘラミガキ、他は内外面共に赤色塗彩。	胎土色調5Y R4/6(赤褐色) No.39・40・50・53・59・60・62・ 63・68・137～149、VI区 完全 実測
18-11	高 坏	坏 脚	18.8 12.7 坏底部5.1 脚端部14.5	坏部内弯外傾し立ち上がる。脚部中位φ1.0～1.05cmの穿孔を3個有し「ハ」の字状に外反する。	内) 坏部赤色塗彩、脚部粗いヘラミガキ 外) 赤色塗彩。	胎土色調5Y R4/6(赤褐色) No.1・2・3・4・5・8・92 VI区 完全実測
18-12	高 坏	坏 脚	(19.5) 13.7 坏底部 (4.1) 脚端部 (14.0)	坏部内弯外傾して立ち上がる。脚部中位やや上にφ1.4～1.5の穿孔を3個有し、「ハ」の字状に外反する。	内) 坏部赤色塗彩、脚部ハケメ調整。 外) 赤色塗彩。	胎土色調5Y R5/6(明赤褐色) No.19・22・23・25～28・ 30～32・34～36 回転実測
18-13	高 坏	坏 脚	9.1 6.7 坏底部3.2 脚端部11.3	小型高坏、坏部内弯外傾して立ち上がる。脚部中位にφ1.1～1.3cmの穿孔を4個有し「ハ」の字状に外反する。	内) 坏部赤色塗彩、脚部ナデ調整。 外) 赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) 脚部内面赤色顔料付着。 No.94～103、III区、V区 回転実測A
18-14	高 坏	坏	10.8 <4.7> 坏底部5.0	小型高坏、坏部内弯外傾して立ち上がる。	内外面共に赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R5/6(明褐色) No.69・70、I区、VI区 回転実測A
19-15	器 台	器 受 脚	(8.7) 8.2 器受部底部 4.6 脚端部 14.8	小型器台。器受部外稜を有し、受口状に立ち上がる。器受部底部φ0.7cmの穿孔を有する。脚部中位やや下φ1.2～1.3cmの穿孔を3個有し、「ハ」の字状に大きく外反する。	内) 器受部赤色塗彩、脚部ナデ調整。 外) 赤色塗彩。	胎土色調5Y R5/6(明赤褐色) No.10～12・14～16・18・20・ 21・33・89・91、VI区、VII区 回転実測B
19-16	器 台	器 受 脚	(8.4) 8.2 器受部底部 2.9 脚端部 13.7	小型器台。器受部外稜を有し、受口状に立ち上がる。器受部底部φ0.8cmの穿孔を有する。脚部中位やや下φ1.2～1.5cmの穿孔を3個有し「ハ」の字状に大きく外反する。	内) 器受部赤色塗彩、脚部粗いヘラミガキ。 外) 赤色塗彩。	胎土色調5Y R5/6(明赤褐色) No.6・7・9・29、VI区 回転実測B
19-17	器 台	器 受 脚	(8.0) 7.5 器受部底部 2.65 脚端部 10.8	小型器台。器受部僅かに外稜を有し、口縁部僅かに外反して立ち上がる。器受部底部φ0.7cmの穿孔を有する。脚部中位φ0.8～1cmの穿孔を4個有し「ハ」の字状に開く。	内) 器受部赤色塗彩、脚部ナデ調整の後粗いヘラミガキ。 外) 赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) 脚部内面赤色顔料付着。 No.150～153・169、I区 回転実測B
19-18	器 台	器 受 底 脚	— <6.0> 器受部底部 (2.9) 脚端部 11.5	小型器台。器受部僅かに外稜を有し、口縁部僅かに外反して立ち上がると思われる。器受部底部φ0.9cmの穿孔を有する。脚部中位φ0.8～0.9cmの穿孔を4個有し「ハ」の字状に開く。	内) 器受部赤色塗彩、脚部ナデ調整の後粗いヘラミガキ。 外) 赤色塗彩。	胎土色調7.5Y R6/6(橙色) 脚部内面赤色顔料付着。 No.161・162 完全実測

がり、深い椀状を呈する。調整は全て坏部内外面及び脚部外面に赤色塗彩が施され、脚部内面は11が粗いヘラミガキ、12がハケメ調整、13にはナデ調整が施されており、13の脚部内面には赤色顔料の付着が観察できる。

小型器台には19—15~18の4点があるが、いずれも器受部と脚部との間には貫通孔を有し、器受部が稜をもって外反気味に立ち上がり、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。脚部の円形の透し孔は3孔のもの（15・16）と4孔のもの（17・18）がある。15・16は器受部に明瞭な稜を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる点と脚部に円形の透し孔を3個有する点で共通する。17は器受部に不明瞭な稜を有し、口縁部は外反して開く。脚部には透し孔を4個有する。18は器受部を欠損しているが、脚部の4個の透し孔を有し、器受部は17と同様に不明瞭な稜を有し外反して開く口縁部を有すると考えられる。

その他、22—57~59で示した櫛描波状文・簾状文・斜走直線文の施文される壺・甕、ハケメ調整の施される甕などが混在し、さらに小片のため図示し得なかったが、大型で無彩の壺、赤色塗彩の施された小片が多数出土している。また、その他の遺物にはガラス小玉（20—1）と人の歯がある。20—1は前期に多くみられる淡青色を呈し、径4mmを測る小型品である。人の歯は総数で10本出土した。詳細については、付編「佐久市瀧の峯古墳群2号墳出土の人歯について」を参照されたい。混入遺物としては、23—1・2の土師器坏・高台付坏の他、22—1~56に示した縄文前期中葉（関山式）から中期後半（加曾利E III~IV）に比定される土器片が多数出土している。石器には、黒曜石製の凹基無茎鏃（24—1）・剝片石器（24—2・3）と硬質砂岩製の縦型石匙（24—4）、花崗岩製の敲石（24—5）がある。

以上、瀧の峯2号墳出土器には二つの様相がみられる。佐久地方在地の弥生時代後期箱清水式期の系譜をひいた土器群と、新たに出現する器種と器形の特徴をもった土器群である。前者は櫛描文・赤色塗彩の多用・壺形土器の胴部下半の稜があげられ、後者は小型精製土器類（小型高坏・小型器台）、壺形土器、小型壺、甕形土器の器形の変化などがあげられる。これらの土器群は、在地の伝統を色濃く残しながらも、外来の影響を受けて新たな次期へと移り変化していく画期の特徴を表しているといえよう。



第21図 瀧の峯5号墳墳丘測量図

3) 瀧の峯5号墳（第21図）

瀧の峯5号墳は、1~4号墳の存在する尾根の先端部に位置しており、標高は764m内外を測り、東方に流れる宮川との比高差は約110mを測る。また、1~4号墳とは約300mの距離を有しており、約36mの比高差を測る。

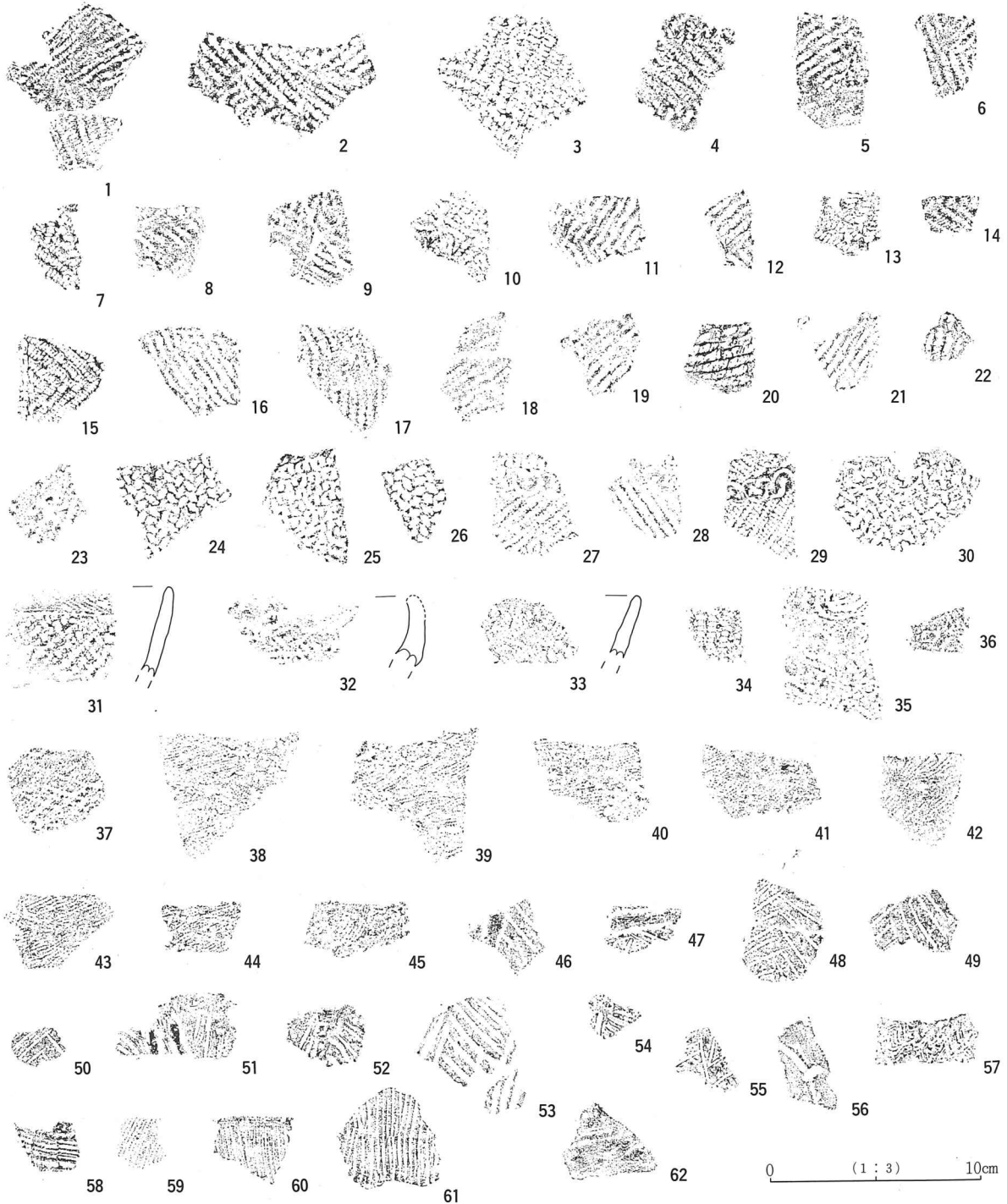
今回行った調査は、墳丘の立ち割り、トレンチの掘り下げ等を行わず、10cmコンターで地形測量を行うのみに留めた。測量の結果、現状で南北約15m、東西約13mの南北にやや長い楕円形を呈し、約2mの高さを有しており、墳頂部の標高は764.5mを測ることが明らかとなった。また、地形図の観察から、方墳となる可能性も考えられるが、現在までのところ判然としない。

（三石）

第2節 その他の出土遺物

瀧の峯古墳群内出土遺物（第22図）

ここでは主に縄文時代の遺物について説明を加えたい。その前に縄文時代の遺跡の存在する可能性について、立地の面から検討してみると、本遺跡が下県（下）の平坦地（氾濫原）を眼下に見下ろせる、蓼科山から発する幾筋かの尾根の先端鞍部で南方に向けて緩い傾斜面を形成し、遠方に浅間山が雄大に聳えている場所であり、東側200m位降りた所は沢になり、宮川が流れている。このような立地であるため、縄文時代（早期～前期）の遺跡の存在する可能性は大である。また、周辺遺跡には、既に調査された榛名平遺跡（1）より、神子柴式尖頭器に類似する硅質



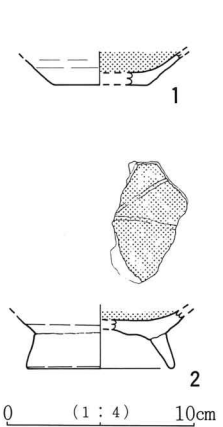
第22図 瀧の峯1・2号墳内出土土器拓影図

第6表 瀧の峯1・2号墳内出土土器拓影図観察表〈1〉

挿 番 号	出 土 位 置	器種・部位	文 様	時 期	備 考
22-1	き8G	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-2	OT2 IV区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-3	OT1	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-4	し12G	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-5	OT2 II区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-6	OT2 IV区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-7	OT2 IV区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-8	OT1	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-9	OT2II区・No77	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-10	OT2 し4G	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-11	OT2 し9G	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-12	OT2 し8G	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-13	OT2 II区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-14	OT2 I区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-15	OT1 攪乱	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-16	OT2 II区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-17	OT1 Fトレ	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-18	OT1 Fトレ	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-19	OT2 II区	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-20	OT2 し8G	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-21	OT2 II区	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-22	OT2 し8G	深鉢 胴部	LR縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-23	OT1 IV区	深鉢 胴部	RL縄文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-24	OT2 し4G	深鉢 胴部	4本組紐rℓ各2本	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-25	OT2 V区	深鉢 胴部	4本組紐rℓ各2本	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-26	OT2 IV区	深鉢 胴部	4本組紐rℓ各2本	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-27	OT2 IV区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文にコンパス文とループ文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-28	OT2 IV区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文にコンパス文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-29	OT2 III区	深鉢 胴部	LR・RLの羽状縄文にコンパス文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-30	OT2 III区	深鉢 胴部	4本組紐rℓ各2本と半截竹管による円形文	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-31	OT2 IV区	深鉢 口縁部	組紐による縄文の後、半截竹管による沈線	縄文前期中葉(関山式)	含繊維系土器
22-32	OT2 I区	深鉢 口縁部	押圧縄文を残す	縄文前期	繊維含む
22-33	OT1 Fトレ	深鉢 口縁部	押圧縄文を残す	縄文前期	繊維含む
22-34	OT2 せ7G	深鉢 胴部		縄文前期	繊維、黒曜石を含む
22-35	OT2 し4G	深鉢 胴部	押圧縄文(圧痕文)の後、竹管文(円形文)を施し半截竹管による平行沈線の区画文	縄文前期 花積上層の可能性有り	繊維含む
22-36	OT2 II区	深鉢	竹管文(円形文)あり	縄文前期	繊維含む
22-37	OT2 III区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-38	OT2周遑I区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-39	OT2 III区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-40	OT2 No79	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-41	OT2 す5G	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-42	OT2 I区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-43	OT2 I区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-44	OT2	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-45	OT2 I区	深鉢 胴部	無節縄文	縄文前期中葉(関山式)	繊維含む
22-46	表 採	深鉢 胴部	微隆起文によって区画、中に綾杉文	縄文中期後半(加曾利EIII)	曾利式土器(IV)

第7表 瀧の峯1・2号墳内出土土器拓影図観察表〈2〉

挿 番 号	出 土 位 置	器 種・部 位	文 様	時 期	備 考
22-47	O T 2 そー8	深鉢 胴部	微隆起文と綾杉文による構成	縄文中期後半(加曾利E III)	曾利式土器(IV)
22-48	O T 2 №156	深鉢 胴部	綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-49	O T 2 せー6	深鉢 胴部	綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-50	O T 2 せー6	深鉢 胴部	綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-51	O T 2 III区	深鉢 胴部	2条の微隆起文によって区画、中に綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-52	O T 2 各主体部	深鉢 胴部	微隆起によって区画、中に綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-53	O T 2 III区	深鉢 胴部	3条の沈線によって区画、中に綾杉文	縄文中期後半(加曾利E IV)	曾利式土器(IV)
22-54	O T 1 Gトレ	深鉢 胴部	沈線によって区画、中に綾杉文	縄文中期後半(加曾利E IV)	曾利式土器(IV)
22-55	O T 2 棺床	深鉢 胴部	綾杉文	縄文中期後半(加曾利E III~IV)	曾利式土器(III~IV)
22-56	O T 2 III区	深鉢 胴部	沈線と突刺文の構成	縄文中期	
22-57	O T 2 IV区	甕 口辺部	櫛描波状文	弥生後期末	墳墓に共伴する
22-58	O T 2 たー11	壺 頸部	櫛描簾状文(2連止め)	弥生後期末	墳墓に共伴する
22-59	O T 1 Cトレ	甕 胴部	櫛描斜走直線文	弥生後期末	墳墓に共伴する
22-60	O T 2 し4G	甕 口辺部	内面ヘラミガキ、外面ハケメ調整	古墳時代前半	外来系土器(土師器)
22-61	O T 2 す6G	甕 頸部	内面ヘラミガキ、外面ハケメ調整	古墳時代前半	外来系土器(土師器)
22-62	表 採	甕	内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ、ハケメ調整	古墳時代	土師器



頁岩製の尖頭器、東立科A遺跡より縄文早期の押型文土器が採集され、前期は沓沢坪⁽³⁾ノ内、大日影遺跡より、関山式土器⁽⁴⁾が出土している。遺構としては後沢⁽⁵⁾、小金平遺跡⁽⁶⁾より住居址が検出されている。中期では大日影、十二下遺跡より曾利系土器が出土している。後期では大日影遺跡より堀ノ内式土器の注口土器、深鉢が採集されている。尚、中村遺跡より前期花積下層・関山式・籠畑式土器と土壌、中期井戸尻・曾利式土器と住居址、土壌等が検出されている。この様に千曲川左岸において、700m~800mの標高を測る丘陵上や谷口扇状地上に縄文時代の遺跡が確認されており、更に、山麓内の開発が進むにつれて、縄文時代早期~前期、それ以前の旧石器時代の遺跡も確認されるであろう。

第23図 瀧の峯2号墳内出土土器実測図

縄文土器(第22図一1~56)
いずれも小片のため、全器形を知り得ず、拓影に留め、器の上下、同一器種の破片

第8表 瀧の峯2号墳内出土土器観察表

挿 番 号	器 種	部 位	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
23-1	土師 環	底	<1.7> 5.0	回転糸切り(難し糸切り)	内) 雑な黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ	胎土色調7.5YR5/6(明褐色) №76、II区
23-2	土師高 台付 環	底	<3.1> 7.8	脚の長い貼付け高台	内) 放射状の暗文を有し、黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ	胎土色調7.5YR6/6(橙色)

であるか、不明の点も多く、抽出方法は、文様の明確に表わされるものを図化し、グルーピングを行った。

第1群土器(第22図一1~45)

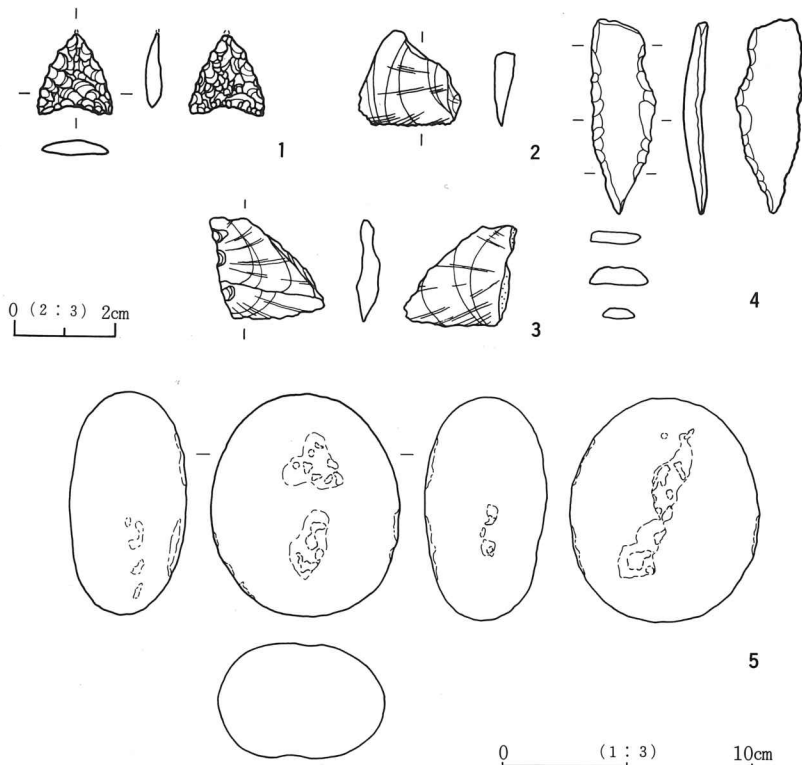
縄文前期中葉(関山式)に比定されるものを、この一群とし、概ね焼成少し脆弱で、混和材をして繊維を含む。

第1類(第22図一1~16)はLR・RLの羽状縄文

第2類(第22図一17~23)は羽状縄文の可能性もあるが、小片のため判明できないもの。

第3類(第22図一24~26)はrℓ各2本の4本組紐。

第4類(第22図一27~29)はLR・RLの羽状縄文にコンパス文の観られるもの。27はループ文も観られる。



第24図 瀧の峯2号墳内出土石器実測図

第5類(第22図-30)は4本組紐に半截竹管による半円形文。

第6類(第22図-31)は波状口縁になると思われ、組紐による縄文施文の後、沈線を1条有する。

第7類(第22図-32~33)は口縁部で、押圧縄文を残す。

第8類(第22図-35~36)の35は押圧縄文(圧痕文)の後、竹管文(円形文)を施し、半截竹管による平行沈線の区画文であり、花積上層の可能性を有する。⁽⁸⁾36は竹管文を有する。

第9類(第22図-37~45)はLrもしくはRℓの無節縄文。

第2群土器(第22図-46~56)縄文中期後半(加曾利E III~IV)に比定されるものをこの群とし、八ヶ岳西麓曾利系土器の影響の強い

土器で、その文様構成は微隆起文、または沈線によって区画、中に綾杉文が施文。56は沈線と刺突文による構成である。尚、佐久において、千曲川が加曾利Eと曾利の文化圏を分つ1つの原因とも考えられ、今後の問題にしたい。

弥生時代終末~古墳時代前期の土器(第22図-57~62)

直接本古墳群に関係する土器片であり、57~59は弥生後期(箱清水)以降、脈々と続いてきた櫛描きによる波状文・斜走直線文・簾状文が残っており、古墳時代前夜の後進性を知るよい手懸かりになる資料であろう。尚60・61は外来系土器と考えられる。

平安時代の土器(第23図-1・2)

本遺跡からは、古墳構築時に伴わない土師器が少量出土した。また、その遺物に伴う遺構も周囲から検出されないことから、本場所を神聖化し、後世祭を行ったとも、僅かな資料から考えられる。23-1は底部離し糸切り、内面雑な黒色研磨、2は脚の長い貼り付け高台で、内面放射状の暗文を有し、黒色研磨が施されている。いずれも外面クロヨコナデであり、宿上屋敷遺跡第4・5号住居址出土⁽⁹⁾土坏に類似していることから、10~11世紀前半の遺物と考えられる。

石器について(第24図-1~5)

24-1は凹基無茎鏃で石質黒曜石、2・3は石質黒曜石で剥片石器で刃部刃毀が観察できる。4は石質硬質砂岩で縦形の石匙である。摘み部僅かに抉りを有し、側辺両面加工と片面加工であり、先端鋭く尖っていることから尖頭状搔器とも考えられる。⁽¹⁰⁾5は石質花崗岩で両面凹状の敲打痕が観察できる。

(羽毛田伸博)

註(1) 川島雅人・前原 豊 1978 「1 岸野榛名平遺跡の調査」 『佐久考古』 No. 4

註(2) 佐久市教育委員会 1983 『五斗代B』

註(3) 佐久市教育委員会 1985 『中村』

註(4) 前掲註 3

註(5) 1978年10月～1979年 6月 佐久市教育委員会によって調査された。

註(6) 佐久市教育委員会 1982年『小金平・立石』

註(7) 前掲註 3

註(8) 福島邦男氏の御教示による。

註(9) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987 『宿上屋敷 下川原・光明寺』

註(10) 堤 隆氏の御教示による。

第3節 分布調査の成果

瀧の峯古墳群のうち1・2号墳は佐久地方はもとより長野県下においても、弥生時代後期から古墳時代前期における墓制の変遷を考える上でたいへんな発見となった。本古墳群の立地は、佐久平のうちでも特に岸野地区を眼下に眺め、そこには、舞台場遺跡等の四世紀代の遺跡が存る。同じ岸野地区で舞台場遺跡より南方にも同時代の遺跡（西裏・竹田峯遺跡、北裏遺跡）が存在しており、これらの遺跡群を眺む西方の山麓や尾根上に、本古墳群に類似するような古墳群の存在が懸念された。昭和57年・58年度に市内詳細分布調査が行なわれてはいるが、分布調査は、古墳については周知されているものの再確認および破壊の進行状況の調査であったため、本古墳群のような横穴石室を持たなくて、しかも、低い盛土の古墳については、見落している可能性がたいへん大きかった。また、近年の市内西山開発計画の多様性を考えると事は早急を要した。

分布調査は、小宮山の後沢遺跡から瀧の峯古墳群を挟んだ相浜の石附古窯址群の存在する山頂および尾根上、山麓に限った。

結果は、驚いたことに新たに6基の古墳の可能性のたいへん高いものと十三塚のような小盛土をもった塚1群、古墳と断定できないが可能性のある小規模な地表面の盛り上がり5ヶ所認められた。

これら新発見のうち特に注目されるのは、西裏遺跡群の西側に隣接した虚空蔵山の東麓にある標高696m付近の方形の盛り上がりである。1辺20～25mを測り、高さは約5mを測る。上部には明神社がのっている。付近からは、縄文・弥生・古墳・平安時代の土器片がかなり多く採集できる。古墳とすれば県下でも有数な規模のものとなる。さらに、この地点より北方100mの地点に、畑作によって西・南方が形状変化しているものの、明らかに古墳の葺石と思われる小礫群が地表下5～10cmに認められる小高い盛り上がりを確認した。眼下には、もろに西裏遺跡群が眺められるところである。さらに、糠尾と沓沢との間に北東方に伸びる丘陵の尾根上にも4基の径10m前後の小高い盛り上がりが存在し、立地的にも注目せねばならないものといえる。 (林)

第V章 総括

第1節 遺構

瀧の峯1・2号墳は、蓼科山から佐久平に向けてのびる尾根地形の一つに所在し、標高は800m内外を測る。ここからの眺望は眼下の岸野地区はもちろん、さらに中込原・岩村田、遠くは浅間山と広範囲に及ぶ。1・2号墳の東側には隣接して3・4号墳が在り、さらに北東約300mには5号墳が存在する。また、今回行われた分布調査によって、周辺の尾根上より6基の古墳が確認されており、さらに未発見の古墳が存在する可能性が高い。

今回の調査の当初の目的は、1・2・5号墳の地形測量、1・2号墳の墳丘形態及び主体部の確認であったが、1号墳の墳丘の立ち割り、2号墳南半部の周溝の掘り下げ、墳丘のストリップを行い、墳丘の封土及び形態をある程度確定することができた。調査の結果、2号墳は、平面形は前方後方形を呈し、方形の主丘部西辺部に撥形にのびる前方部状の突出部があることが明らかとなった。墳丘は旧表土を残したまま地山を削り、方形に整えた後に盛土を行っている。突出部は地山のローム層を削り出して作り、突出部前端の整形は認められない。規模は全長18.3m、主丘部の長さ12.6m、幅13m、高さ1.3m、括れ部からの高さ0.6mを測り、突出部は長さ5.7m、括れ部の幅2.5m、前端部の幅4.5mを計測する。1号墳はトレンチによって調査したのみであるため明確ではないが、主丘部の長さ13m、幅10.5mを測り、形態は周溝の開き具合や地形の状況から2号墳と同様、西辺部に突出部を有する前方後方形を呈すると考えられる。

周溝は東側でやや不明瞭となるものの、突出部前端部を除いて全周する。幅は突出部両側で最も広く5.7m、南側で3.0m～3.4m、深さは西側で約0.4m、南側で1m前後を測る。周溝を含めた規模は、全長21.5m、幅19.5m前後を測るものと思われる。以上が瀧の峯1・2号墳の墳丘及び周溝の概要である。

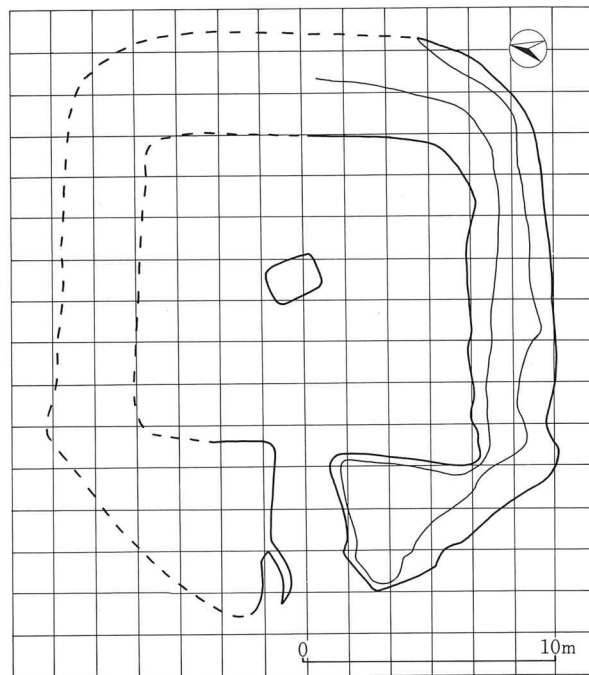
弥生時代の墓制は方形周溝墓に代表され、茨城県須和間遺跡、東京都宇津木遺跡、大阪府瓜生堂遺跡等の発掘調査により、方形周溝墓に墳丘が存在したことが明らかになった。しかし、茂木雅博氏は、『墳丘よりみた出現期古墳の研究』で、これらの墳丘は、埋葬用ピットを埋めるための覆土であり、埋葬用ピットを掘った後に築造されたものであることから、方形周溝墓に存在した封土と、大型古墳墳丘の封土とは異質のものであるとしている⁽¹⁾。本古墳群の主丘部築造のあり方は、まず、旧地表面を残し、その上部へ地山のローム層を盛土し、墳丘の形成後、墓壇を構築している。

弥生時代終末の墳丘墓は、全長数m～数十mのものまで規模はさまざまで、形態も各地域毎に差異をもって存在している。円形や方形の墳丘に通路状の低い突出部をもつ前方後円(方)形墳丘墓が出現する。岡山県倉敷市楯築遺跡にみられる円形の墳丘の両側に張出をつけたもの、長方形の墳丘の短辺の両側に列石二段で画した突出部を有する兵庫県養久山5号墓がある。また、出雲地方を中心に四隅突出型方形墳丘墓が現れる。方形台状の四隅が対角線上に大きく張り出す墳形を呈しており、島根県安来市仲仙寺9号墳、宮山4号墳、鳥取県西桂見墳丘墓などが代表的である。これらの墓制は、定形化した画一的な前方後円墳の出現に先立つものであり、近藤義郎氏は、「墳丘墓」として「古墳」と区別する見解を示している⁽²⁾。また、前方後方形墳丘墓の前方部前端に溝を設け、溝を全周させるものも存在しており、大阪府九宝寺遺跡、加美遺跡、滋賀県富波遺跡などにみられる。この後、山陰・山陽地方では、安来市造山2号墳、岡山市備前車塚古墳群に代表される画一化した前方後円(方)墳が出現する。

東国の前方後円(方)墳については田中新史氏が、4世紀末にみられる全長100m前後の大型古墳、4世紀後半の

主軸長50～60m前後の定形化した前方後円墳、普遍的に存在する小規模低盛土前方後方墳の三グループに区分し、さらに、小規模低盛土前方後円(方)墳を細分している。前方後円型をA、前方後方型をBとし、さらに各々を前方部長と括れ幅にほとんど差がなく、前方部の未発達な段階をI型、I型と同様に前方部前面に溝をもたないが、前方部の長さで先端幅が拡大し、周溝幅よりも長く延びた形態のものをII型、前方部前面に浅い溝を巡らし前方部の発達したものをIII型、前方部前面の溝も後方部と同じ幅で巡らした50mクラス以上の墳形と変わらない周溝形態をとるものをIV型としている⁽³⁾。千葉県神門4号墳はA II型に属し、瀧の峯1・2号墳はB II型に属するものであり、他にB II型に属するものとして、長野県田村原2号墓、石川県小菅波4号墳、群馬県鈴ノ宮4号墓、埼玉県塚本山33号墓などがあげられる。

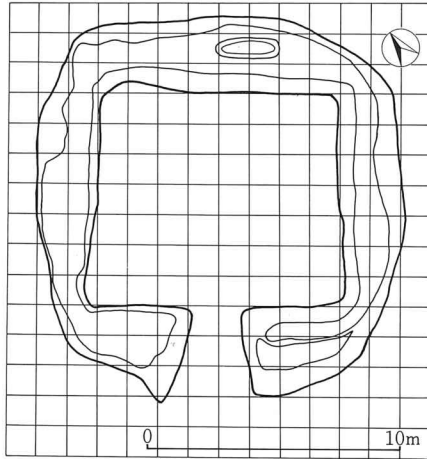
前方後円(方)墳の築造企画については、上田宏範氏、甘粕 健氏、梶 国男氏、宮川 渉氏ら多くの論考がある⁽⁴⁾が、今回、瀧の峯2号墳の築造企画を検討するに当たり、宮川 渉氏の後円(方)部に対しての前方部の長さを比較するために、後円部径(後方部幅)を8等分し、前方部前端部の位置を検討する方法を用いて試みた。



第25図 瀧の峯2号墳平面企画復元図

瀧の峯2号墳と同様、B II型に属する田村原2号墓、小菅波4号墳、塚本山33号墓についての検討を行った結果、1区の長さは、瀧の峯2号墳・小菅波4号墳が162.5cm、田村原2号墓が120cm、塚本山33号墓が175cmと相異が認められるものの、後方部長は、田村原2号墓が7区を示す他は、ほぼ8区の正方形を呈し、前方部については、いずれも3区となる。さらに後方部の周溝もおおむね2区におさまることが明らかとなった。

これらの検討から、それぞれ形態や規模は異なるものの、非常に類似した企画性をもっていることが認められる。古墳の企画に使われた基準尺度については、高麗尺・前漢尺・大尋・小尋等が想定されているが、現段階では基準尺度の問題まで言及するには至らなかった。



第26図 田村原2号墓平面企画復元図

田村原2号方形周溝墓⁽⁵⁾

所在地 長野県下伊那郡豊丘村

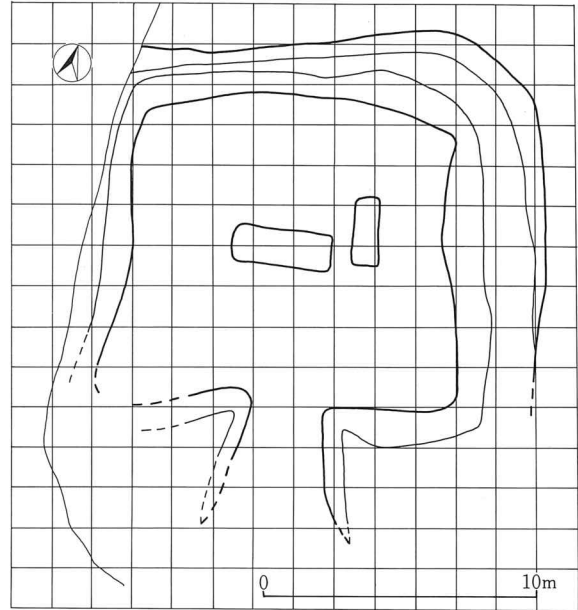
伊那谷第5段丘面に位置し、標高525~530mを測る。14×14mの隅丸方形の区画に溝を巡らし、南に陸橋を有する。陸橋部は西側で3.85m、東側で3.50mを測り、三角形に広がる。墳丘は既に失っており、主体部は確認されなかった。

塚本山33号墓⁽⁷⁾ 所在地 埼玉県美里町

塚本山丘陵の南斜面に立地し、周田には方形周溝墓群が存在する。規模は、全長18m、後方幅14mを測る。

鈴ノ宮4号墓⁽⁸⁾ 所存在 群馬県高崎市

井野川左岸の河岸段丘上に位置し、標高は85m前後を測る。溝を含めた規模は、東西約13.8m、南北19.4m、台状部は11.8×10.6mのほぼ方形を呈し、南辺中央にブリッジを有するが、西側の溝が南に延びて前方後方状を呈する。弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられ、他に4号墓と同様にBII型に属する11号墓と、古墳時代前期と考えられ、BIII型に属する7号墓が存在する。



第27図 小菅波4号墳平面企画復元図

小菅波4号墳⁽⁶⁾

所在地 石川県加賀市小菅波町

全長17mを測り、13×12mのやや不定形な方台状を呈する主丘部に前方部状の突出部を有する。墳丘は自然地形を削り出して作り、現状で約70cmの盛土を有する。埋葬施設は木棺直葬で、墳底を地山面におく。月影期の堅穴住居址を切っており、古府クルビ期の所産とみられる。

第2節 遺物

今回行った瀧の峯古墳群確認調査の当初の目的は、墳丘の構築過程を明らかにすることではなく、墳形及び周溝の確認を目的としたものであるため、墳丘周囲にトレンチを設定して確認調査を行ったが、2号墳西側Aトレンチ内より18-1の壺形土器が出土し、周溝内に築造年代を決定する資料になり得る遺物が存在することが予想され、周溝の発掘調査によって、規模・墳形・周溝の範囲等を確定し、古墳に伴う遺物を検出することは、佐久地方最古とされる本古墳の性格を明らかにする上で必要であるとの判断から、2号墳南半部についての墳丘のストリップ及び周溝の掘り下げを行った。そのため、1号墳の出土遺物は非常に少ないものの、2号墳からは、周溝内より比較的まとまった量の遺物が出土した。そこで、本稿では2号墳の出土遺物を中心に簡単にまとめを行ってみたい。

瀧の峯2号墳から出土した土器の器種には壺・小型壺・甕・鉢・高坏・器台があり、1号墳の土器には鉢がある。そのうち、2号墳では壺2点、小型壺5点、甕2点、鉢1点、高坏4点、器台4点の18点、1号墳では鉢1

点の計19点が図化できた。19点のうち15点が赤色塗彩され、鉢・高坏・器台は全ての個体に赤色塗彩が施されている。

壺（18-1・2）

胴部最大径に比して器高が低く、ソロバン玉状を呈する胴部に、受口状を呈すると思われる口縁部を有するもの（1）と胴部は偏球状に大きく張り、胴部下位に稜を有するもの（2）がある。前者は、口縁部内外面・外面胴下半に赤色塗彩が施され、頸部に櫛描横走平行線文を不揃いに縦に区画した粗雑化されたT字文が施文される。後者は無彩で、頸部に櫛描簾状文が施文される。以上、櫛描文が施文され、胴下半部に稜がみられるなど、箱清水式土器の要素を残しながら、2の胴部が球胴化し、1の非在地系土器の出現がみられるなど外来の影響を受け、次期への過渡的様相を示している。

小型壺（18-3～7）

4を除くと全て欠損品であるため明確ではないが、いずれも直線的に外傾する口縁部を有し、胴部は球胴形を呈すると思われる。5点のうち、5を除く4点に赤色塗彩が施される。

甕（18-8・9）

口縁部に櫛描波状文、胴上半部に櫛描斜走直線文、頸部に櫛描簾状文が施文されるもの（8）と頸部にハケメ調整の施されるもの（9）が存在する。前者は、櫛描文が施文されるなど箱清水式土器の要素が認められるが、従来の箱清水式期の甕に比べ、口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部が球胴化するなど土師器的な器形をとりながら櫛描文が施文され、弥生式土器から土師器へ移行する時期の様相を示すべきものである。

鉢（18-10、11-1）

18-10は、口径28.3cmを測る大型品で、器肉厚く、体部はわずかに内弯して立ち上がる。11-1は、口径14.7cmを測る小型品で、体部は内弯して立ち上がり、端部で内稜をもって外反する。調整はいずれも内外面とも赤色塗彩が施される。

高坏（18-11～14）

口径19cm前後の大型品（11・12）と9～10cmを測る小型品（13・14）とがある。いずれも赤色塗彩され、脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は内弯して立ち上がり碗状を呈しており、東海地方西部の元屋敷式の高坏にその系譜が求められる。脚部の円形の透し孔は大型品が3個、小型品が4個有し、小型品（13）の脚部径は坏部径をしのごう。

器台（19-15～18）

いずれも器高8cm前後の小型品で赤色塗彩され、器受部と脚部との間に貫通孔を有するが、器受部に明瞭な稜を有し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの（15・16）と、器受部の稜が不明瞭で、口縁部が外反して開くもの（17）とが存在している。脚部の円形の透し孔は、前者が3個であるのに対し、後者は4個の透し孔を有する。15・16にみられる器受部に明瞭な稜を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる器台形土器は、飯田市恒川遺跡群⁽⁹⁾、三重県鳥羽市大畑遺跡SK1⁽¹⁰⁾に類例がみられ、小型高坏と同様、東海地方西部の元屋敷式に出自が考えられる。

以上が瀧の峯1・2号墳の出土土器の概略であるが、これらの土器には、佐久地方在地の弥生時代後期箱清水式期の系譜をひいた土器群と、新たに出現する器種と器形の特徴をもった土器群の二つの様相がみられる。前者は18-1・2・8にみられる櫛描文の施文、18-2にみられる胴下半部の稜、19個体中15個体にみられる赤色塗彩の多用などがあげられる。後者は、18-13・14の小型高坏、19-15～18の小型器台の出現、18-2・8にみられる胴部の球胴化などがあげられる。これらの土器群は、在地の伝統を色濃く残しながらも外来の影響を受けて新たな次期へと移り変化していく画期の特徴を表しているといえよう。

弥生時代後期において、千曲川水系の箱清水式土器、天竜川水系の中島式土器、関東地方西部の樽式土器などに代表されるように、各地域ごとに異なった土器様相が認められるが、弥生時代終末期になると、他地域からの

外来系土器の流入がみられるようになる。長野県や関東地方には、東海地方や北陸地方の土器の出土例がみられる。佐久地方においても、外来の土器や影響を受けた土器を出土する遺跡が近年の発掘調査によって確認されている。佐久市西裏遺跡⁽¹¹⁾・下小平遺跡⁽¹²⁾・西一里塚遺跡⁽¹³⁾・池畑遺跡⁽¹⁴⁾・宿上屋敷遺跡⁽¹⁵⁾・小諸市久保田遺跡⁽¹⁶⁾などがその代表的な遺跡であり、在地の伝統を継続している弥生時代終末の土器群に、県内の南信地方、さらに、東海地方・北関東・南関東・北陸地方からの影響の窺える非在地系の土器が流入している。

本古墳群の眼下にある西裏遺跡第4号溝状遺構の資料には複合口縁の壺、ハケメ調整の施される平底甕、小型丸底埴、鉢があり、いずれも古墳時代前期前半の土器組成中にみられるものである。その他、第10号住居址より畿内系のものと考えられる埴、攪乱溝より北陸系の法仏II・月影・古府クルビ式に類例のみられる小型高坏が出土している。池畑遺跡第1号住居址の資料には、椀形の坏部と大きく「ハ」の字状に開く脚部を有し、東海地方西部の元屋敷式に系譜の求められる小型高坏と胴部の球胴化を窺わせる壺があり、外来系の土器の進出が認められるが、在地的な櫛描文の施文される甕、胴下半部に稜のみられる壺など箱清水式土器の伝統が強く残っており、在地土器の解体が始まる時期と考えられ、善光寺平では青木編年I期、伊那谷では恒川VI期に類似性がみられる。また、久保田遺跡Y2・3号住居址、第1号円形周溝墓、第2号方形周溝墓から、小型器台、ハケメ調整の施された甕、台付甕、S字状口縁台付甕b類など次期的様相を示す土器と胴下半部に稜を有する壺、櫛描文の施文された甕、赤色塗彩が壺・坏・高坏・器台等に多用されるなど箱清水式土器の系譜上にある土器が混在しているが、櫛描文の施される甕に本資料18-8と器形において類似性がみられ、本資料と近似した時期が想定される。

宿上屋敷遺跡第1・6号住居址の資料には壺・甕・台付甕・鉢・小型高坏があり、調整方法などに箱清水式土器の要素がわずかに残存しているが、ハケメ調整の施された甕、球胴化した胴部を有する壺、東海地方西部からの影響を受けたと考えられるS字状口縁台付甕・小型器台などがあり、在地の箱清水式土器の系譜上にあるものがほとんど見られなくなり、外来系土器が在地化・定着化した時期と考えられ、青木編年ではIII期、恒川編年ではVIII期に位置付けられている。その他、該期の遺跡として、佐久市今井西原遺跡⁽¹⁹⁾、望月町後沖遺跡⁽²⁰⁾、更埴市灰塚遺跡H1号住居址⁽²¹⁾などがある。

以上、佐久地方における弥生時代終末から古墳時代初頭の検出例を、住居址出土遺物を中心として概観したが、本古墳群の資料は、鉢・高坏・器台にみられる赤色塗彩の多用、櫛描文の施文、壺の胴下半部にみられる稜など箱清水式土器の系譜をもつものがみられるが、小型高坏・小型器台などの外来系土器の多様化、壺・甕の著しい器形の変化など東海地方を主とする他地域の影響を窺うことができ、池畑例に後出する時期と考えられる。また、19-15・16の器受部に明瞭な稜を有し、口縁部が直立気味に屈曲して立ち上がる小型器台は、恒川VII期に出現するとされ⁽²²⁾、三重県鳥羽市大畑遺跡SK1⁽²³⁾では、S字状口縁台付甕赤塚分類C類と伴出し、また、岡谷市下蟹河原遺跡⁽²⁴⁾では、肩部の平行線文のみられないD類に属するS字状口縁台付甕、小型丸底埴等と共伴している。従って、本資料は、恒川編年VII期～VIII期（元屋敷中～新段階）に該当すると考えられる。

以上、瀧の峯1・2号墳出土土器について若干の考察を行ったが、比較資料の乏しい現段階において、本資料の位置付けを行うことはかなり困難なことである。今後の資料の増加により、補正・修正を行い、当地方の弥生式土器から古式土器への変遷過程がより明らかにされるものとする。

(林・三石)

第3節 まとめ

長い間、佐久平には横穴式石室出現以前の古墳は存在しない、と考えられてきた。これは、千曲川が通じていながら、善光寺平ともニュアンスを異にする弥生文化を、あれだけ繁栄させた土地の現象としては、奇異の念を抱かされることでもあった。そして私どもは、まさにその点において、古墳がもつ政治的性格を見いだそうとしたものであった。つまり、ヤマト王権との間に政治関係が成立しないかぎり、在地の政治的・経済的成熟をもつてしても、古墳は出現しない、ということである。

その後、北西ノ久保遺跡の発掘調査により発見された19基の古墳のうち15基までが、横穴式石室以前の所産であること、そしてその初めが5世紀中葉近くまで遡りうることなどが明らかになった。⁽²⁵⁾だが、このようなことは、近年の古墳時代研究の推移からして、やがてそうなるであろうと、予測しうる範囲内のことでもあった。それにくらべると、このたびの瀧の峯「古墳」群の発見は、予期していないことであった。それだけに、佐久地方はるか、長野県の歴史を考えるうえで、また古代地域史研究の場において、きわめて重要な意義をもつものと考えている。

私はさきに、瀧の峯「古墳」群と、古墳という字句をカッコ付きで表現した。それは、このたび調査された瀧の峯の埋葬遺構を古墳の範疇に加えるか、あるいは弥生墳丘墓のうちにとどめるべきかは、学界でも意見が分かれるところだからである。微妙な問題を含んでいるので、煩を顧みずに、まず今回の調査成果で浮かび上がったポイントのいくつかを再度検討しておこう。

立地と存在形態

瀧の峯遺跡は、集落から隔絶した、そしてそれらを一望におさめることができるような山丘頂に立地している。これは、佐久市を含む長野県内の弥生時代墓に、かつてみることがなかった立地である。たとえば、佐久市後沢遺跡では、ある種の階層性を反映するといわれる方形周溝墓も、集落に隣接する場に営まれていた。⁽²⁶⁾総じて弥生時代墓は、生者の世界からの隔絶性に乏しいのが、この地の一般的傾向といえるのである。そして、山丘頂という埋葬遺構の立地は、後続する古墳に普遍的なことは、松本市弘法山⁽²⁷⁾、更埴市森將軍塚古墳⁽²⁸⁾などの例からして、明確である。

ただ、その存在形態となると、話は異なってくる。すでに詳述されているように、瀧の峯遺跡では、墳丘をもつ埋葬遺構が4基、それこそひしめきあうかのように接近して築かれているのである。しかも今回の調査結果からすれば、突出部の大きさ、溝幅などを総合してみたとき、僅かに1号丘の方に古さを感じさせはするが、時期的に大きく隔たるとは思えない。すなわち、4つの墳丘は、決して一世代一遺構という時間差をもって築かれたものとはいえないのである。

このような、同時期・同規模の埋葬遺構が群在するさまは、さきの弘法山古墳や森將軍塚古墳には見いだせない。この点は、むしろ逆に弥生時代の方形周溝墓などに通じるあり方というべきだろう。列島の規模でみるなら、有名な島根県仲仙寺の四隅突出型墳丘墓⁽²⁹⁾、あるいは千葉県飯合作の周溝墓群⁽³⁰⁾もまた類似したあり方といえるだろう。この場合、前者は弥生時代墓なのに、後者は古墳時代に属し、調査者はこれらを古墳の範疇でとらえている。いずれにせよ、このようなあり方は、圧倒的な優位性を確保できない。換言すれば未成熟な首長権であるがゆえ、といえるだろう。したがって、古墳であっても小規模なそれであれば、群在することは十分にありうるのである。誰しものが古式古墳と認める、奈良県池ノ内古墳群⁽³¹⁾などの円墳群は、そのような側面をうかがわせるものといえるだろう。

墳丘の形態

このたび調査された1号・2号丘とも、西に突出部をもつ前方後方形の墳丘で、およそ全長は18mを前後したら

しい。1号丘の溝幅は2.5mを前後するのに、2号丘のそれは3mほどであった。注目すべき点は、墳丘をめぐる周溝は、前方部にあたる突出部前面だけ切れており、この部分に向けて墳丘も徐々に高さを減じ、あたかも通路を思わせる様相を呈していた。

長野県内で発見された方形周溝墓の大多数が、溝の一部を掘り残し、墓域と外界とを結ぶ通路を思わせるあり方を示すのとある面で共通している。

これに対して、周堀をめぐる前方後円墳は、前方部前面をも掘り残すことなく、堀を完全に四周させて、墳丘を外界から隔絶させる。堀を持たない場合でも、前方部前端は崖を思わせる急斜面とすることによって墳端を画し、意図的に通路を断ったかの趣きを呈している。都出比呂志教授らは、このような隔絶性を、古墳の重要な属性だと主張する。⁽³²⁾したがって、瀧の峯1・2号丘の前方部状突出部と同様なあり方をする、千葉県神門4・5号丘などは、隔絶化以前の弥生墳丘墓であると想定する。

たしかに、長野県内でも、諏訪市一時坂⁽³³⁾や下伊那郡豊丘村田村原2号⁽³⁴⁾など、いわゆる前方後方形周溝墓の突出部端は、溝を掘り残す通路状のあり方をとっている。だが、同じく弥生時代の周溝墓の範疇でとらえられる長野市聖川3号丘の場合は、幅1.5m内外と狭くはあるが、突出部前面にも堀がめぐっていた。⁽³⁵⁾いっぽう、多くの人が弥生墳丘墓として疑わない、岡山県楯築の墳丘にみる二つの突出部の端は、ともに急崖をなし、巨石で画されていた。⁽³⁶⁾隔絶的な姿というべきだろう。すなわち、前方部あるいは突出部端のあり方は、必ずしも古墳か墳丘墓かを区別する上での、絶対的な条件とはいえないのであろう。

墳丘にかかわるいま1つの論点は、突出部（前方部）が、在地の方形周溝墓の土橋（堀の掘り残し部）に発する漸移的な変化の結果生まれたとみるのか、あるいは他地方で成立した「前方部」に影響されて付設されるようになったと考えるのか、という点である。瀧の峯1・2号丘の突出部は、さつみ型→田村原型→瀧の峯型と型式変化をとげたと説明できなくもないからである。

しかし、前方後方形の低墳丘をもつ、いわゆる周溝墓は、決して長野県下特有のものではない。すでに滋賀県富波・愛知県廻間・群馬県堀之内・埼玉県石蒔・千葉県飯合作など、極めて広域で同巧のものが発見されている。田中新史氏らが、突出部をもつ千葉県神門4・5号丘を他地域の影響下に成立したと想定したうえで、その地域をこえる共通性を評価しながら、これを古墳と主張する点は、十分に留意する必要がある。⁽³⁷⁾

にもかかわらず、いわゆる古墳には外形ばかりか、長大な埋葬施設と副葬品の組成など、あらゆる点ではかに定型的なのである。

被葬者について

瀧の峯2号丘の埋葬施設から、1人分の歯牙が発見された。そして森本岩太郎教授は、その特色から、被葬者は壮年期の女性であろうと推断された。

唯一の副葬品であるガラス小玉は、前期古墳に普遍的な、銅発色によるスカイ・ブルーを呈するものだった。副葬品からみるかぎり、被葬者に超越的な権力をうかがうことはできない。同規模の群在する墳墓からする推測と矛盾しないといってよい。だが、突出部（前方部）をもつ墳形からすれば、被葬者は並みの人物ではなく、基盤は弱いにせよ、首長クラスの立場にあったと考えられるだろう。

もし、血統（出自）が問題になる時期であれば、女性首長もありえようが、その場合は、いまだ高貴な血筋を表現する副葬品があってよい。階級的な隔絶性を帯びた、高貴な血筋にかかわりがなくとすれば、被葬者である女性は、やはり個人的な資質、おそらく卑弥呼にも通じる、特異な霊力の保持者であったと考えたくなる。そして、ほとんど副葬品を持たない埋葬のあり方は、被葬者が、高貴な血筋などの成立以前の、共同体的関係の中でのみ生きられた首長であったことを暗示しているといえるのではなかろうか。

周溝内の土器

2号丘の周溝内からは、数多くの土器が出土した。それらのうち甕・壺類には、先行する箱清水式土器からの

流れが明確に読みとれる。いわゆる御屋敷式土器⁽³⁸⁾の一群といえる。これらに混じて出土する小型器台・高杯・小型壺などには、明らかに東海西部地方のその影響がある。第18図1は、山中式に端を発する壺とよく、小型高杯は変形は激しいが、これまた元屋敷式土器の影響下に成立したものと考えられる。だが最も注目したいのは小型器台である。上方に折り上がる器受部の外表には、明瞭な稜がみられる。このような特色は、発現地の東海西部地方では、元屋敷式土器でも新段階のものにみられる。赤塚次郎氏は、これがS字口縁台付甕C類の出現と時を同じくする、と説明している⁽³⁹⁾。いわゆるパレス・スタイル壺⁽⁴⁰⁾でいえば、連続山形文が施文される、E類壺に併行するものともいえよう。

いっぽう、岡谷市下蟹河原⁽⁴¹⁾・群馬県石田川⁽⁴²⁾などの遺跡では、同じS字口縁台付甕でも新しい、肩部上方の「横線文」を欠く土器と共伴している。すなわち、この種の小型器台の使用期間は、ある程度の年代幅をもたせて考える必要がありそうである。

さて、瀧の峯2号墳の出土品が示す形態上の特色は、一見してその中でもやや新しいと直感する人は多いだろう。だが、これを赤彩するなど、在地化の著しさを考慮すれば、資料数が乏しい現段階で、そこまで断じることには許されまい。したがって、いまはパレス・スタイル壺E類を上限とする四世紀後半期のなかに位置づけようだろうと想定するにとどめたい。

もし、この年代観がそれほど不当でないとするなら、瀧の峯1・2号丘が築かれたころには、少なくとも松本市弘法山古墳などは出現していたことになる。

これまで述べてきたことを総合して、瀧の峯「古墳」群のカッコを外すか否かを考究する段階に到達した。だが、このきわめて過渡的な埋葬遺構を何と呼ぶかは、まさに一人一人の古墳時代観にかかわる問題である。したがって、いまはあえて私見をさしはさむことなく、大方の判断に委ねたいと考えている。

(岩崎卓也)

- 註(1) 茂木雅博 1987 『墳丘よりみた出現期古墳の研究』
- 註(2) 近藤義郎 1986 「5 前方後円墳の誕生」 『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』
- 註(3) 田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」 『古代 63』
- 註(4) 宮川 渉 1983 「前方後円(方)墳の設計と尺度」
『季刊 考古学 第3号 特集 古墳の謎を解剖する』
- 註(5) 豊丘村教育委員会 1974 『田村原遺跡』
- 註(6) 谷内尾晋司 1986 「北陸の前方後方墳」 『考古学ジャーナル No.269 特集 前方後方墳』
- 註(7) 坂本和俊 1984 「埼玉県の前期古墳概観」
『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 註(8) 金子智一他 1984 「烏川・井野川流域における古墳出現期の地域相」
『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 註(9) 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 註(10) 石川考古学研究会 1986 『シンポジウム「月影式」土器について 報告編』
- 註(11) 小山岳夫他 1986 『西裏・竹田峯』 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 註(12) 工藤かよ子他 1981 『下小平遺跡』 佐久市教育委員会
- 註(13) 臼田武正 1982 「餅田遺跡・西一里塚遺跡」『長野県史 考古資料編 全一卷(2) 主要遺跡(北・東信)』
小山岳夫 1987 「西一里塚遺跡の外来系土器—西一里塚遺跡採集の棒状浮文土器をめぐって—」
『長野県考古学会誌 53』

- 註(14) 羽毛田伸博他 1986 『池畑・西御堂』 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 註(15) 三石宗一他 1987 『宿上屋敷 下川原・光明寺』 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 註(16) 花岡 弘 1984 『久保田』 小諸市教育委員会
- 註(17) 青木一男 1984 「善光寺平南域における古墳出現期集落土器について」
『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 註(18) 註9に同じ
- 註(19) 佐久市教育委員会 1975 『今井西原』
- 註(20) 福島邦男 1984 「後沖遺跡」 『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 註(21) 更埴市教育委員会 1971 『下条・灰塚』
- 註(22) 註9に同じ
- 註(23) 註10に同じ
- 註(24) 白田武正 1986 「第二章 古代の集落」 『茅野市史 上巻 原始古代』
- 註(25) 小山岳夫他 1987 『北西ノ久保』 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 註(26) 林 幸彦他 1987 『佐久市後沢遺跡調査概報』 佐久市教育委員会
- 註(27) 斎藤 忠他 1978 『弘法山古墳』 松本市教育委員会
- 註(28) 八幡一郎他 1973 『長野県森將軍塚古墳』 更埴市教育委員会
- 註(29) 近藤 正 1972 『仲仙寺古墳群』 安来市教育委員会
- 註(30) 沼沢 豊他 1978 『佐倉市飯合作遺跡』 千葉県文化財センター
- 註(31) 泉森 皎他 1973 『磐余池ノ内古墳群』 奈良県教育委員会
- 註(32) 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」 『考古学研究 26—3』
- 註(33) 永峯光一 1988 「弥生時代の信仰と葬制」 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
- 註(34) 酒井幸則他 1974 『田村原遺跡』 豊丘村教育委員会
- 註(35) 註33に同じ
- 註(36) 近藤義郎他 1987 『倉敷市楯築弥生墳丘墓発掘調査概要報告』 楯築弥生墳丘墓発掘調査団
- 註(37) 田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」 『古代 63』
1984 「出現期古墳の理解と展望」 『古代 77』
- 註(38) 森嶋 稔他 1980 『編年』 千曲川水系古代文化研究所
- 註(39) 赤塚次郎 1987 「逍遙する土器」 『欠山式土器とその前後 — 研究・報告編 —』
愛知考古学談話会
- 註(40) 浅井知宏 1986 「パレススタイル」 『欠山式土器とその前後』 愛知考古学談話会
- 註(41) 藤森栄一 1939 「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」 『考古学 10—11』
- 註(42) 松島栄治他 1968 『石田川』 「石田川」刊行会

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
1986 『池畑・西御堂』
1987 『宿上屋敷 下川原・光明寺』
1987 『北西の久保一南部台地上の調査一』
- 小諸市教育委員会 1984 『久保田』
- 望月町教育委員会 1983 『後沖遺跡』
- 松本市教育委員会 1978 『弘法山古墳』
- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 高崎市教育委員会 1981 『元島名将軍塚古墳』
- 磐田市教育委員会 1982 『新豊院山墳墓群 D地点調査報告書』
- 鯖江市教育委員会 1987 『西山古墳群』
- 埼玉県史編纂会 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』
- 石川考古学研究会 1986 『シンポジウム「月影式」土器について 報告編』
- 上総国分寺台遺跡調査団 1974 『東間部多古墳群』
- 奈良県立橿原市考古学研究所 1976 『纏向』
- 青木 一男 1984 「善光寺平南域における古墳出現期集落土器について」 『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 赤塚 次郎 1986 「S字甕について」 『欠山式土器とその前後』 第3回東海埋蔵文化財研究会
1986 「S字甕覚書'85」 『年報』昭和60年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 石野 博信 1985 『古墳文化出現期の研究』
- 石野 博信他 1987 『古墳発生前後の古代日本 弥生から古墳へ』
- 岩崎 卓也 1984 「古墳出現期の一考察」 『中部高地の考古学 III』 長野県考古学会
1986 「三、四世紀の東と西」 『東アジアの古代文化 46号 特集 弥生から古墳へ』
- 大塚 初重 1984 「東国における古墳の発生」 『東アジアの古代文化 38号 特集 古墳の発生と発展』
1986 「前方後方墳研究の現状と展望」 『考古学ジャーナル No.269 特集 前方後方墳』
- 大参 義一 1968 「弥生式土器から土師器へー東海地方西部の場合ー」 『名古屋大学文学部研究論集(史学)』
- 近藤 義郎 1986 「5 前方後円墳の誕生」 『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』
- 田中 新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」 『古代』第六十三号
1986 「東国の古墳時代出現期とその前後」 『東アジアの古代文化 46号 特集 弥生から古墳へ』
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」 『考古学研究』第26巻 第3号
1987 「前方後円墳成立期の地域性」 『埼玉考古 第23号ー埼玉県考古学会30周年記念ー特集号』 埼玉考古学会
- 花岡 弘 1986 「土師器の成立と古墳時代ー古代信濃の編成過程を語るー」 『歴史手帖 2』
- 林 幸彦 1987 「第一節 古墳の出現と瀧の峯一・二号古墳」 『岸野村誌』
- 北條 芳隆 1986 「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価ー成立当初の畿内と吉備の対比からー」
『考古学研究』第32巻 第4号
1987 「5 墳丘の形態と方位からみた弥生墳丘と前方後円墳ー吉備と畿内との関係を中心にー」
『日本考古学協会1987年度大会 研究発表要旨』
- 水野 正好 1984 「前方後円墳の成立」 『東アジアの古代文化 38号 特集 古墳の発生と発展』
- 宮川 涉 1983 「前方後円(方)墳の設計と尺度」 『季刊 考古学 第3号 特集 古墳の謎を解剖する』
- 茂木 雅博 1984 「前方後円墳と前方後方墳」 『東アジアの古代文化 38号 特集 古墳の発生と発展』
1987 『墳丘よりみた出現古墳の研究』
- 森嶋 稔 1982 「御屋敷遺跡」 『長野県史 考古資料編』全1巻(2)
- 谷内尾晋司 1986 「北陸の前方後方墳」 『考古学ジャーナル No.269 特集 前方後方墳』
- 山下 誠一 1984 「飯田・下伊那地域の古墳出現期の様相」 『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』

付 編

佐久市瀧の峯古墳群 2 号墳出土の人歯について

聖マリアンナ医科大学教授 森本 岩太郎

I はじめに

佐久市大字根岸所在の瀧の峯古墳群 2 号墳は、4 世紀代に属する前方後方型を呈する墳墓である。昭和61年 8 月～11月の発掘調査により、この古墳から人の歯が発見された。佐久埋蔵文化財調査センターからの依頼により筆者はこれらの歯を調べたので報告する。

II 人歯の出土状況

瀧の峯古墳群 2 号墳の後方部にある主体部 3 区墓墳内の第 4 層最下部から、人の遊離歯破片だけが数個発見された。人骨片は全く見当たらなかった。土壌には埋葬に当ってベンガラ（または朱？）が施され、ガラスの小玉 1 個が伴出したという。

III 人歯の所見

遊離歯の破片は全部で10個あり、そのうち4個が上顎歯片、6個が下顎歯片である(写真1)。それらを次に示す。

×××××3××	××345×××
×××××××1	×23456××

ただし、アラビア数字は存在する遊離歯、×印は存在しない歯を示す。下顎左第 1 大臼歯は小破片である。歯の咬合様式は鋏状咬合型で、歯の咬耗度は上・下顎とも切歯・犬歯・大臼歯が Broca 2 度、小臼歯が同 1 度である。当時は歯の咬耗度が現代より進んでいることを考慮に入れると、歯の咬耗度から推定されるこの個体の年齢は概ね壮年期であろう。歯の大きさが小さいので、おそらく女性と思われる。歯に歯石や齲蝕は認められない。

IV まとめ

佐久市瀧の峯古墳群 2 号墳出土の 4 世紀代に属する人の歯は、壮年期女性の歯 1 個体分であると思われる。

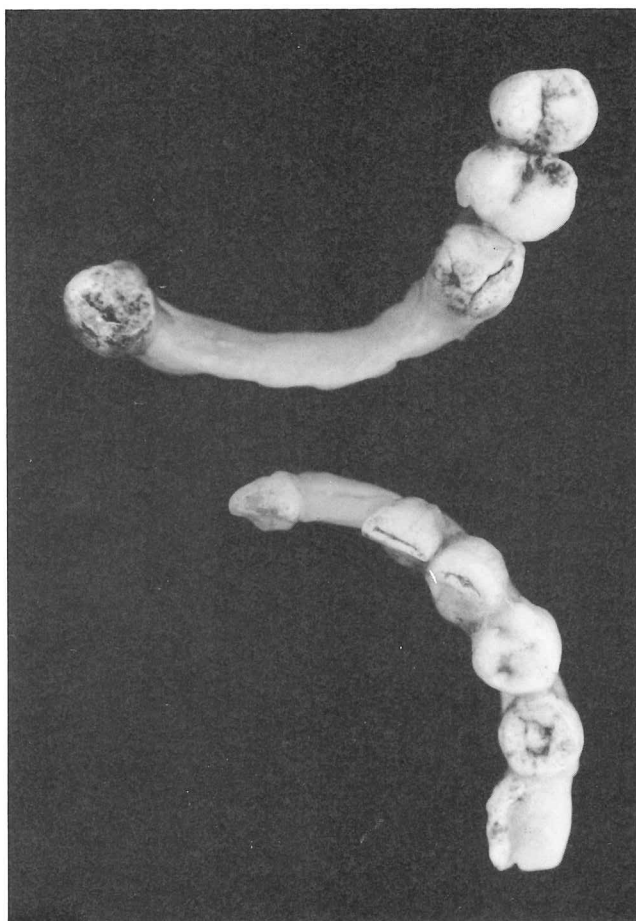
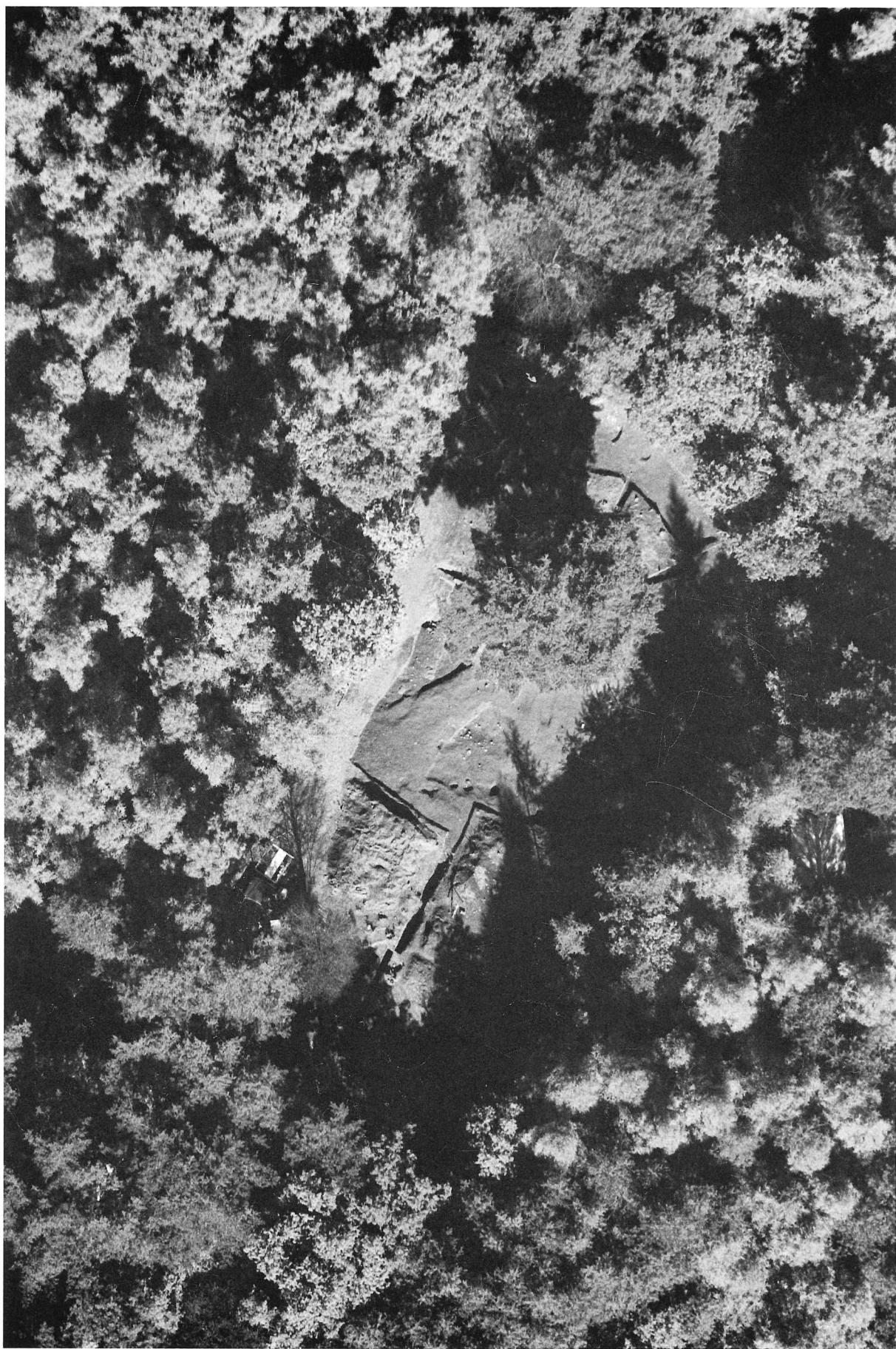


写真1 瀧の峯古墳群 2 号墳出土の人歯
上方が上顎歯、下方が下顎歯の各片



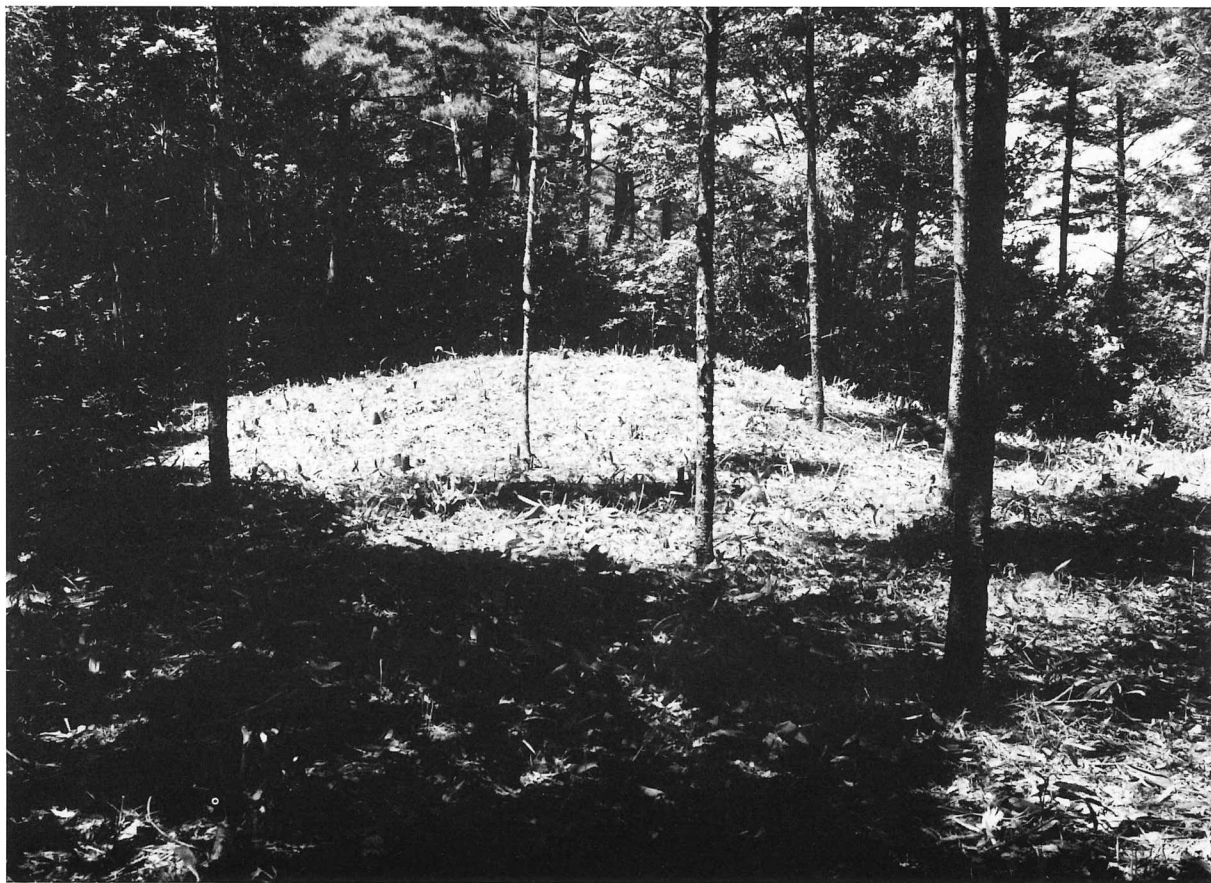
瀧の峯古墳群付近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影C13-11）



瀧の峯1・2号墳航空写真



1. 瀧の峯古墳群遠景（東方より）



2. 1号墳近景（東方より）



1. 1号墳墓残存部（南方より）



2. 1号墳墓残存部（西方より）



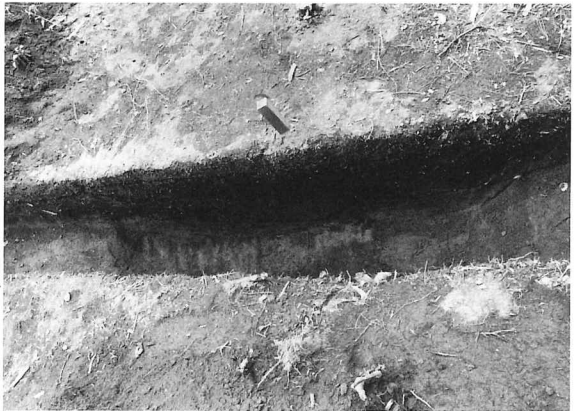
3. 1号墳墓断面（南方より）



4. 1号墳墳丘トレンチ



5. 1号墳Aトレンチ（南方より）



6. 1号墳Fトレンチ（東方より）



7. 1号墳Lトレンチ（西方より）



8. 1号墳Sトレンチ（東方より）



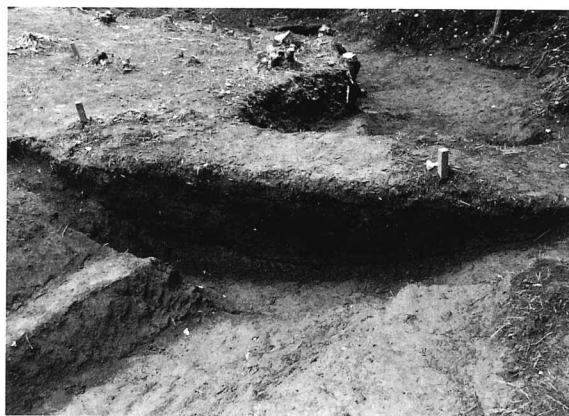
1. 1号墳全景（東方より）



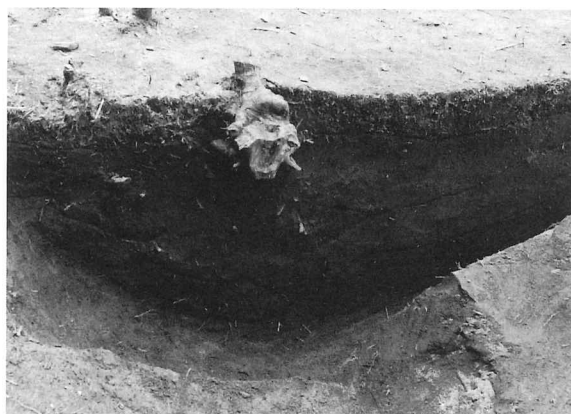
2. 2号墳近景（南方より）



1. 2号墳Aトレンチ (北西より)



2. 2号墳Bトレンチ (南西より)



3. 2号墳Jトレンチ (東方より)



4. 2号墳Kトレンチ (南方より)



5. 2号墳周溝内遺物出土状況 (南方より)



1. 2号墳周溝内遺物出土状況（東方より）



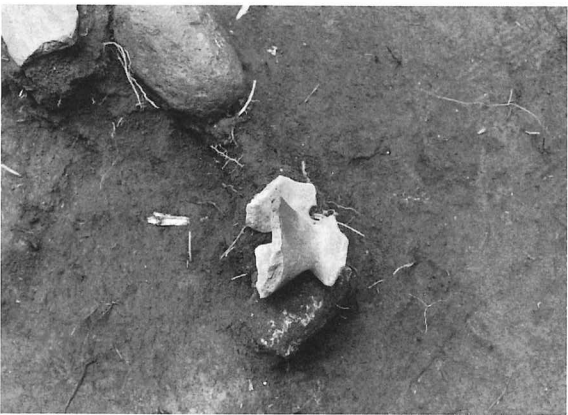
2. 2号墳周溝内遺物出土状況（東方より）



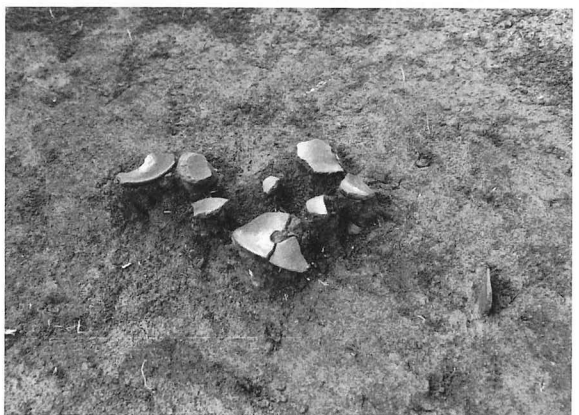
3. 2号墳周溝内遺物出土状況（東方より）



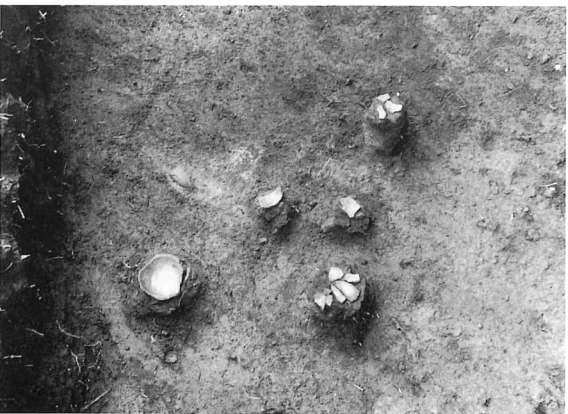
4. 2号墳周溝内遺物出土状況（東方より）



5. 2号墳周溝内遺物出土状況（東方より）



6. 2号墳周溝内遺物出土状況（南方より）



7. 2号墳周溝内遺物出土状況（南方より）



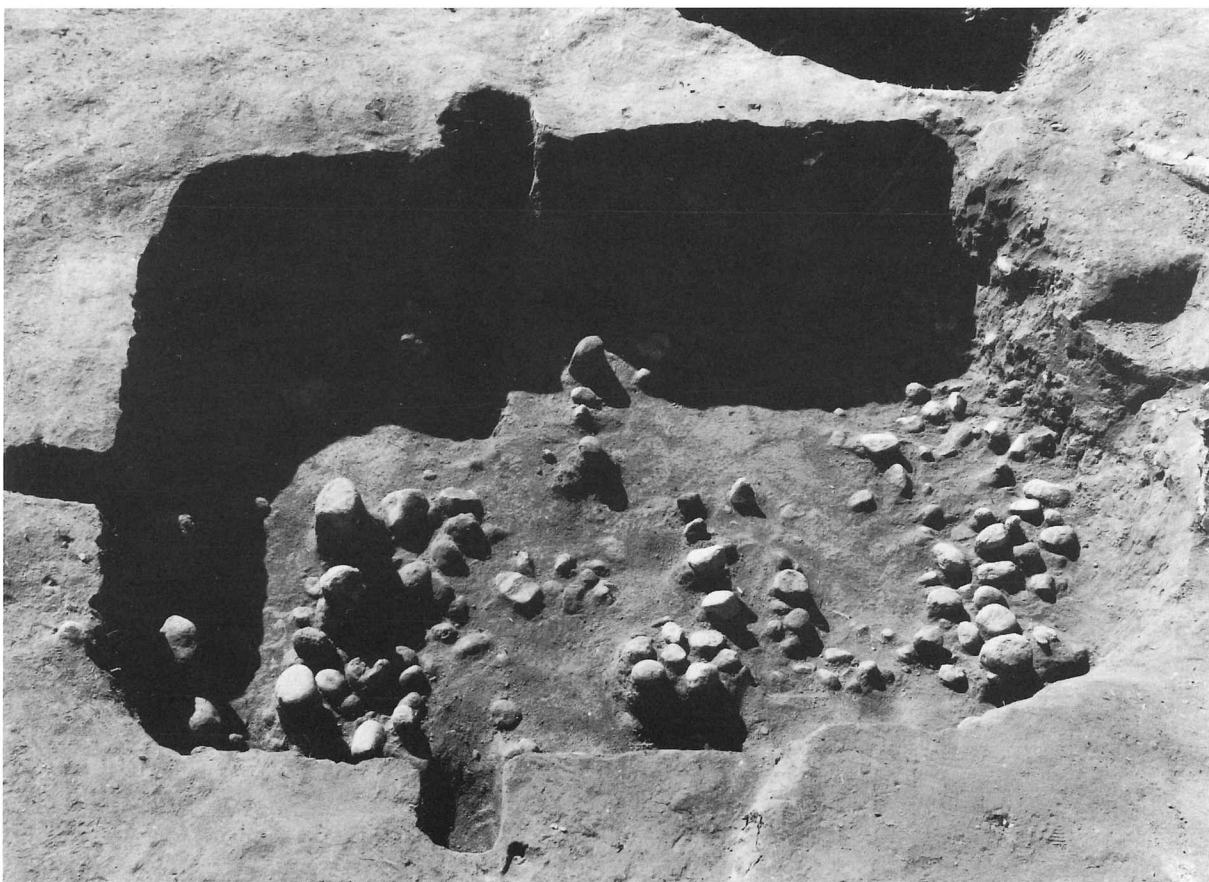
8. 2号墳周溝内遺物出土状況（西方より）



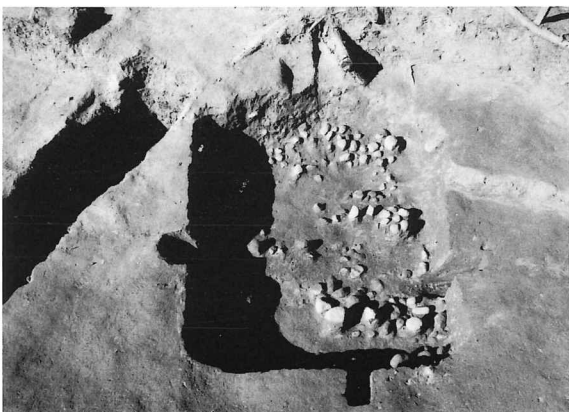
1. 2号墳周溝内遺物出土状況（南方より）



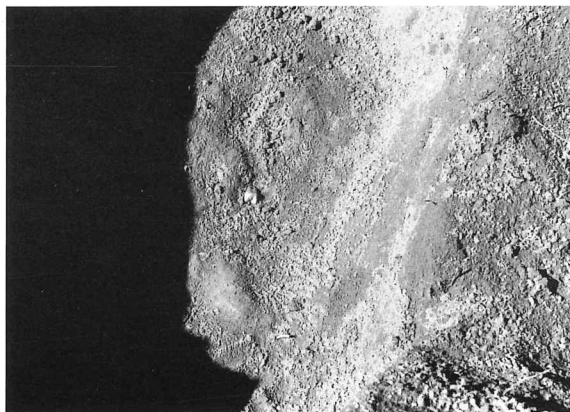
2. 2号墳周溝内遺物出土状況（南方より）



3. 2号墳墓壙（北東より）



4. 2号墳墓壙（南東より）



5. 2号墳墓壙内人歯出土状況（南方より）



1. 2号墳南辺部周溝（東方より）



2. 2号墳東辺部周溝（南方より）



3. 2号墳墳丘（南方より）



4. 2号墳墳丘（南方より）



5. 2号墳墳丘（西方より）



6. 2号墳突出部（西方より）



7. 2号墳墳丘及び突出部（南方より）



8. 2号墳墳丘及び突出部（西方より）



1. 2号墳全景（南西より）



2. 2号墳全景（西方より）



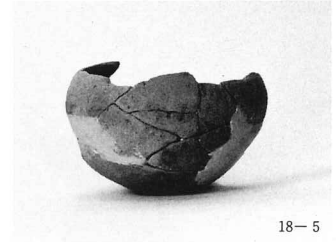
1. 1号填出土土器

11-1



4. 2号填出土土器

18-4



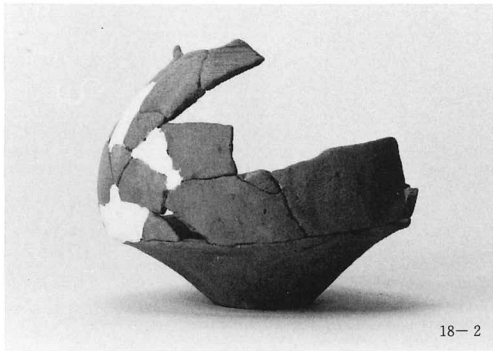
5. 2号填出土土器

18-5



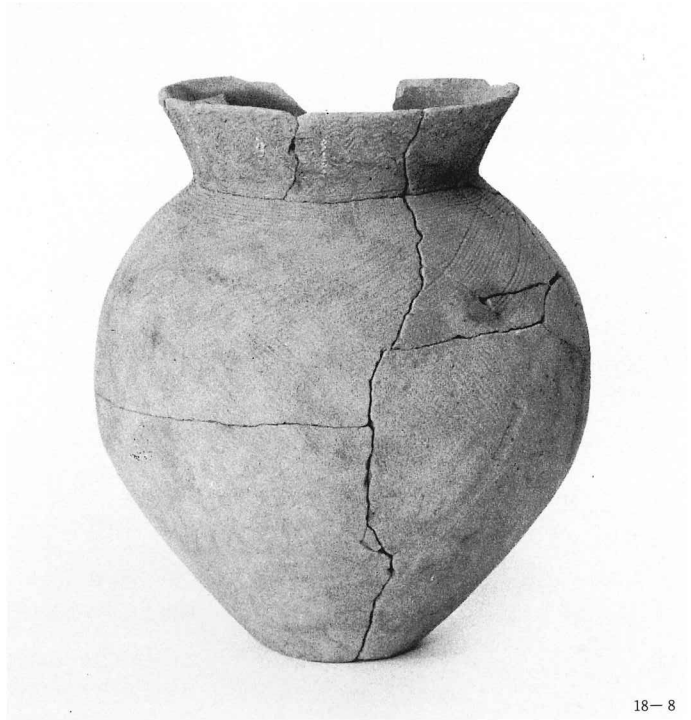
2. 2号填出土土器

18-1



3. 2号填出土土器

18-2



6. 2号填出土土器

18-8



8. 2号填出土土器

18-11



7. 2号填出土土器

18-10



9. 2号填出土土器

18-12



10. 2号填出土土器

18-13



19-15

1. 2号墳出土土器



19-16

2. 2号墳出土土器



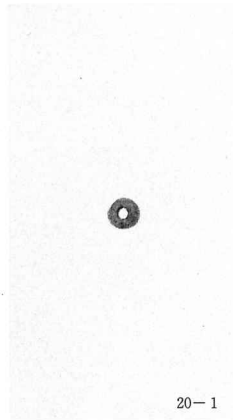
19-17

3. 2号墳出土土器



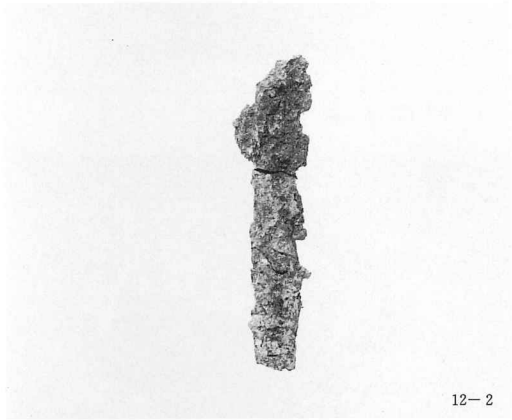
19-18

4. 2号墳出土土器



20-1

5. 2号墳出土ガラス小玉



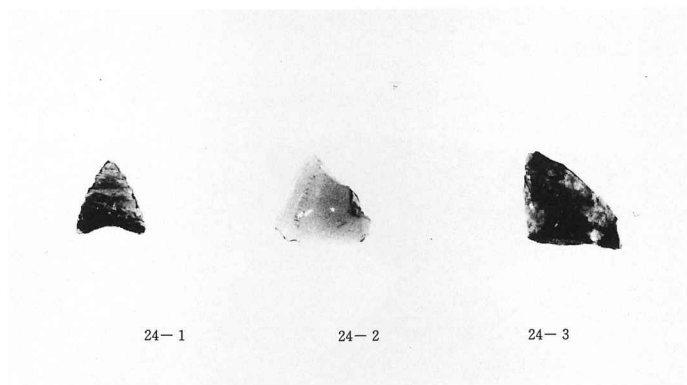
12-2

6. 1号墳出土鉄製品



12-1

7. 1号墳出土鉄剣

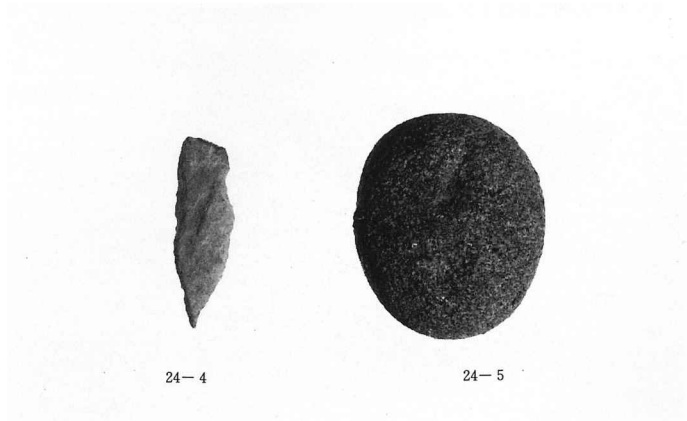


24-1

24-2

24-3

8. 2号墳内出土石器



24-4

24-5

9. 1号墳内出土石器



1. 調査スナップ



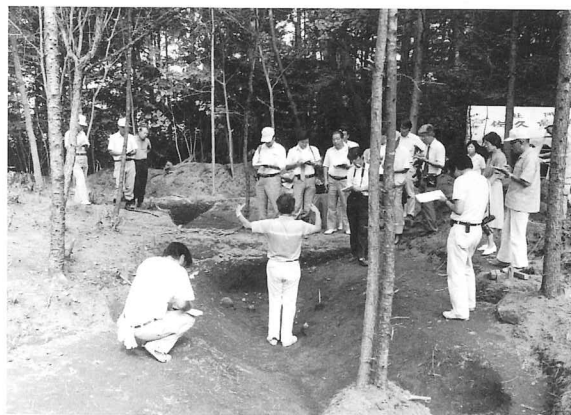
2. 調査スナップ



3. 調査スナップ



4. 調査スナップ



5. 調査スナップ



6. 調査スナップ



7. 調査スナップ



8. 調査スナップ

佐久埋蔵文化財調査センター	第1集	〔西裏・竹田峯〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第2集	〔池畑・西御堂〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第3集	〔芝間〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第4集	〔新町II〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第5集	〔宿上屋敷、下川原・光明寺〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第6集	〔淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第7集	〔高師町・西大久保〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第8集	〔北西ノ久保〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第9集	〔梨の木〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第10集	〔菅田III・新町III・宮の上・中曾根・藤塚〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第11集	〔長峯古墳群〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第12集	〔西祢ぶた〕
佐久埋蔵文化財調査センター	第13集	〔薊沢・鳶石〕

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第14集

長野県佐久市瀧の峯古墳群発掘調査報告書

1987年3月

編集者	瀧の峯古墳群発掘調査団
発行者	佐久市教育委員会
印刷所	株式会社佐久印刷所
